



江戸名所圖會

二



丘氏之記



連ね燈の光ハ玲瓏とく流小映中樓船扁舟所せと多ひつと
一時水面を覆ひかへてあつても陸地は異ならず
耳小満く薫く実小大江戸の盛衰なり

此人救給ふまハ丁をささみその那

子人々を操櫂やそそみ同

この河より同ふみゆるものなりし芭蕉

清水如水宅地 横山町に住るとして水ハ藤根堂と号は狂

歌名あり 常は酒を飲する時ハあゆむとて言語を發す

如永一時大和國法隆寺に蔵する所の賢聖の瓢といふ器物を

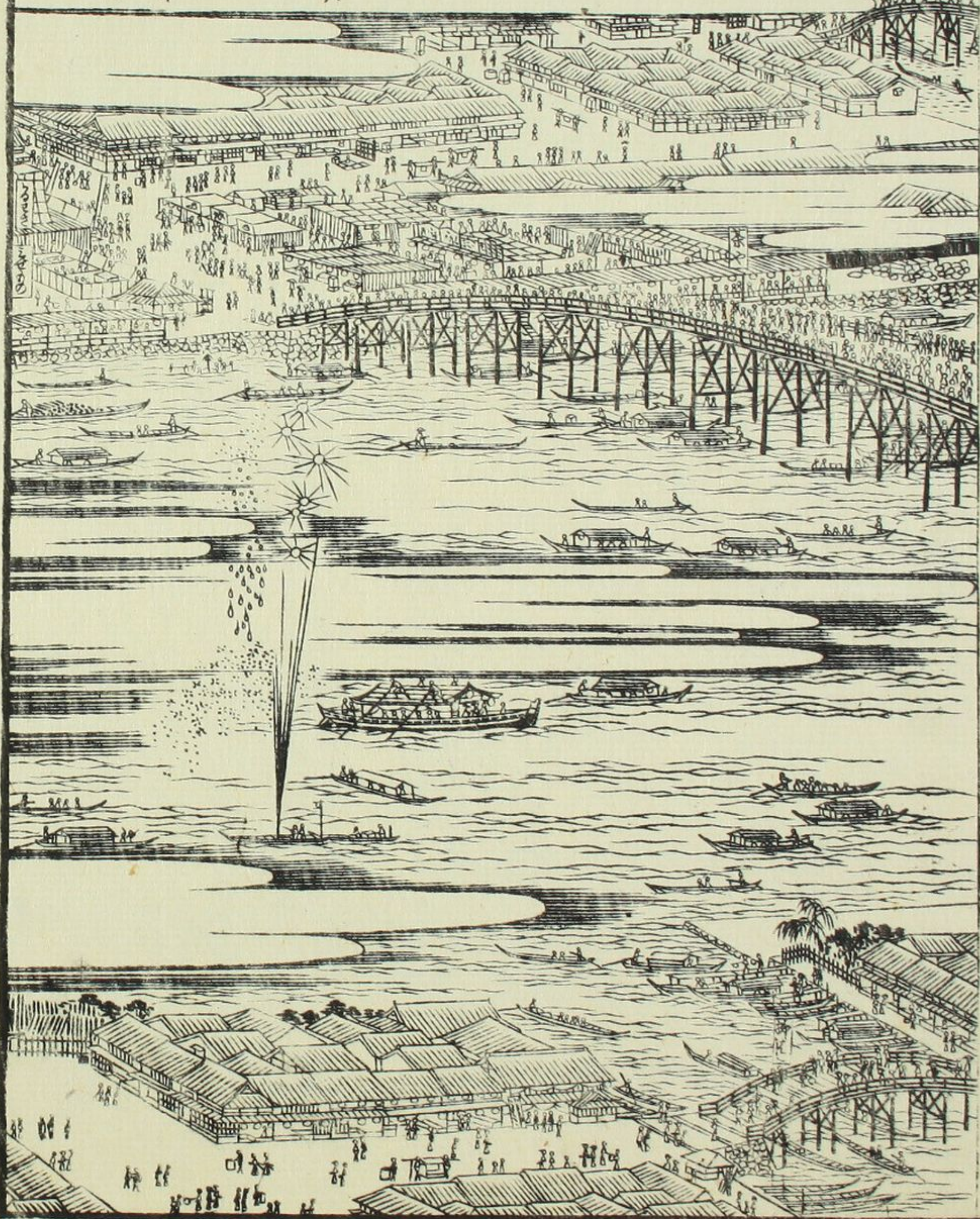
見ると後瓢は彫物をささるるを滑りあつて鈍刀を用ひて

其巧尤絶妙なり依て所需多かりければ此匏瓜の爲ふ身を

押へられりとの意あり自ら迷淵蟠鯨候とそ名のりる住家



此人 舟 氷 其角



より東は茶研堀と云ふあり其辺知人の許は行く樓上より
遠近を見ゆり

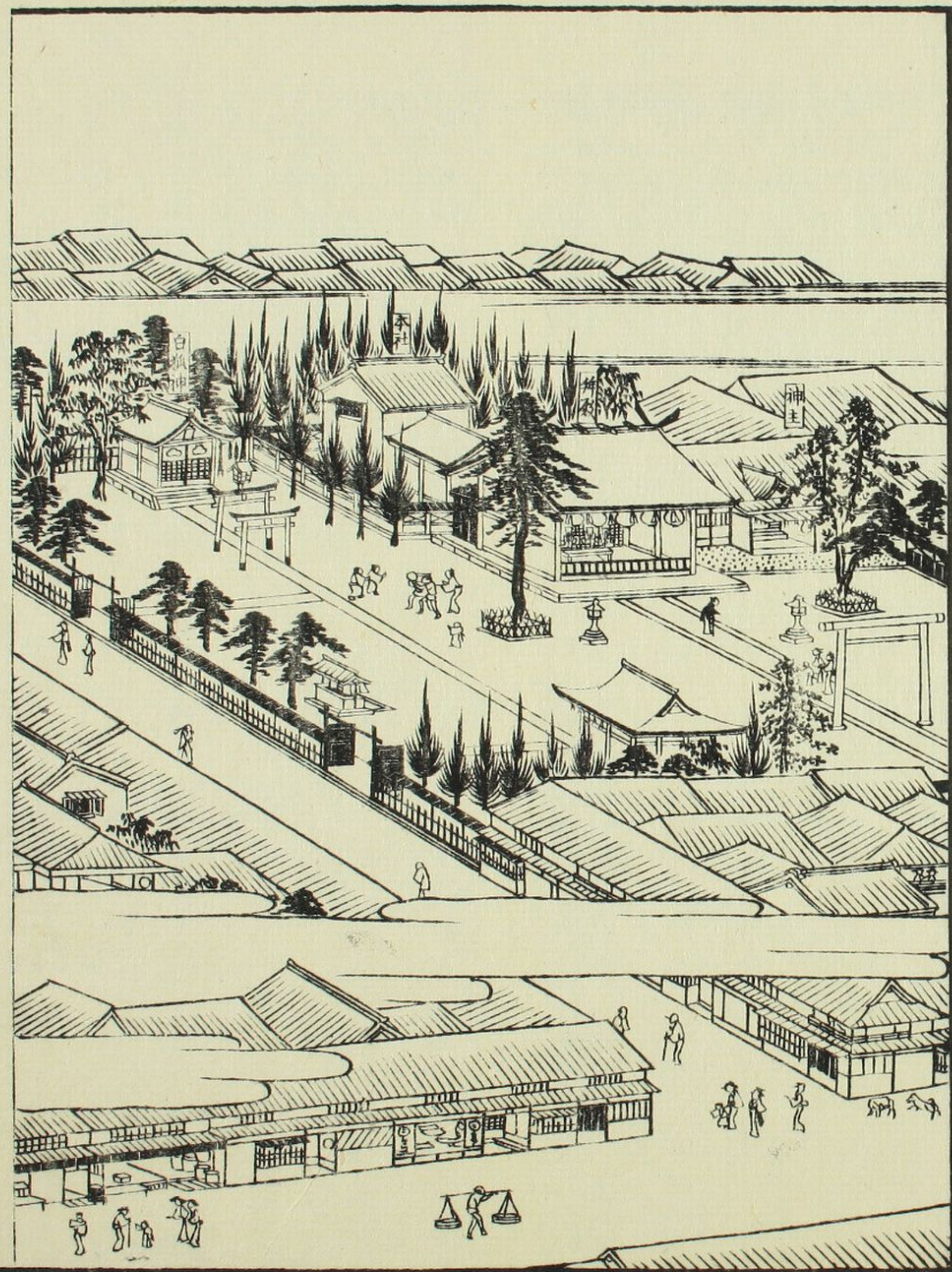
又ある時漢父の辞の意をうめる
又ある時漢父の辞の意をうめる

享保十三年戊申正月三日朝起き
公引嚙喰地倉雷火より後日飢饉なるを國へゆく

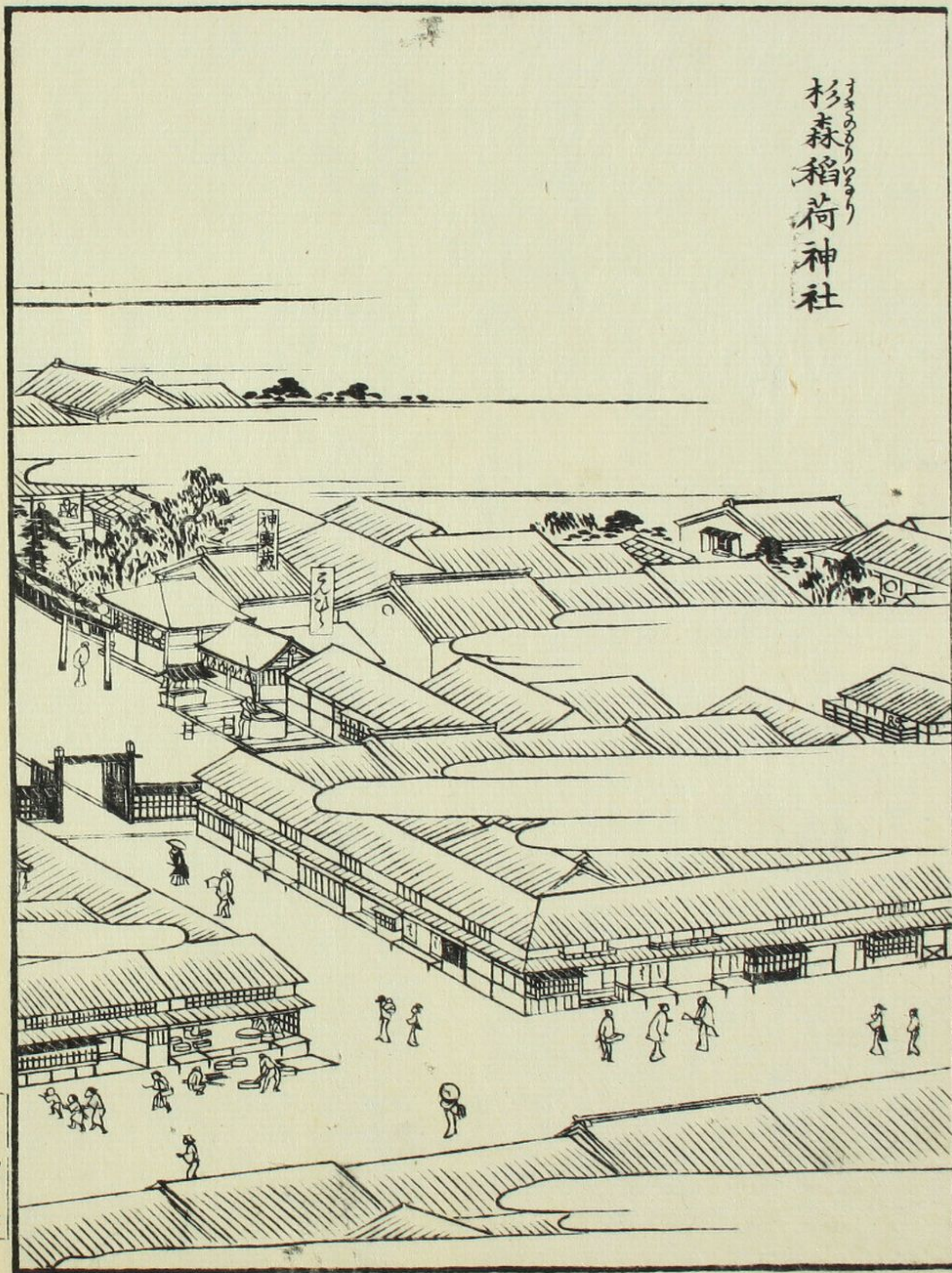
かつらとて同一五日の暮方剃頭湯ありて大神宮を拜し

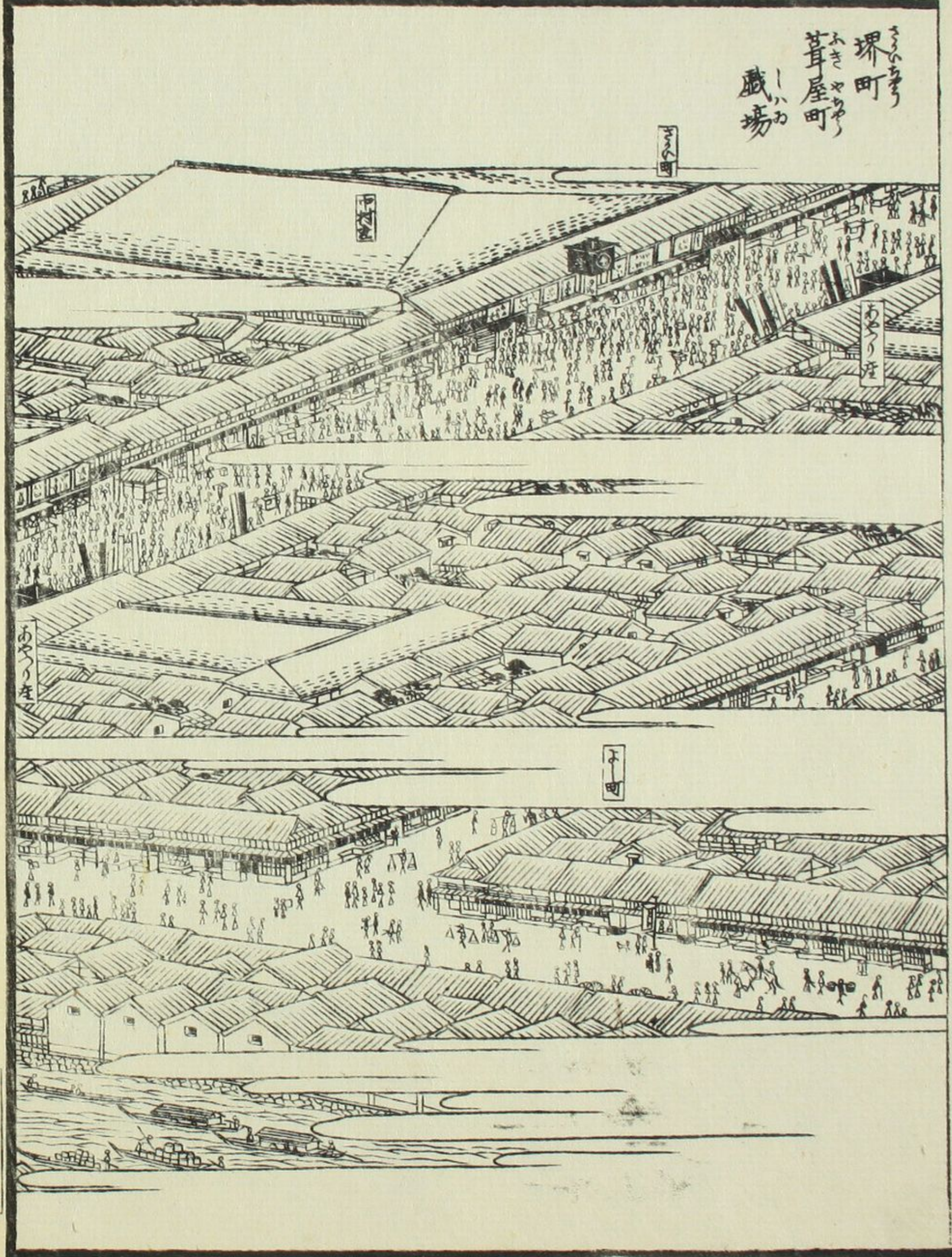
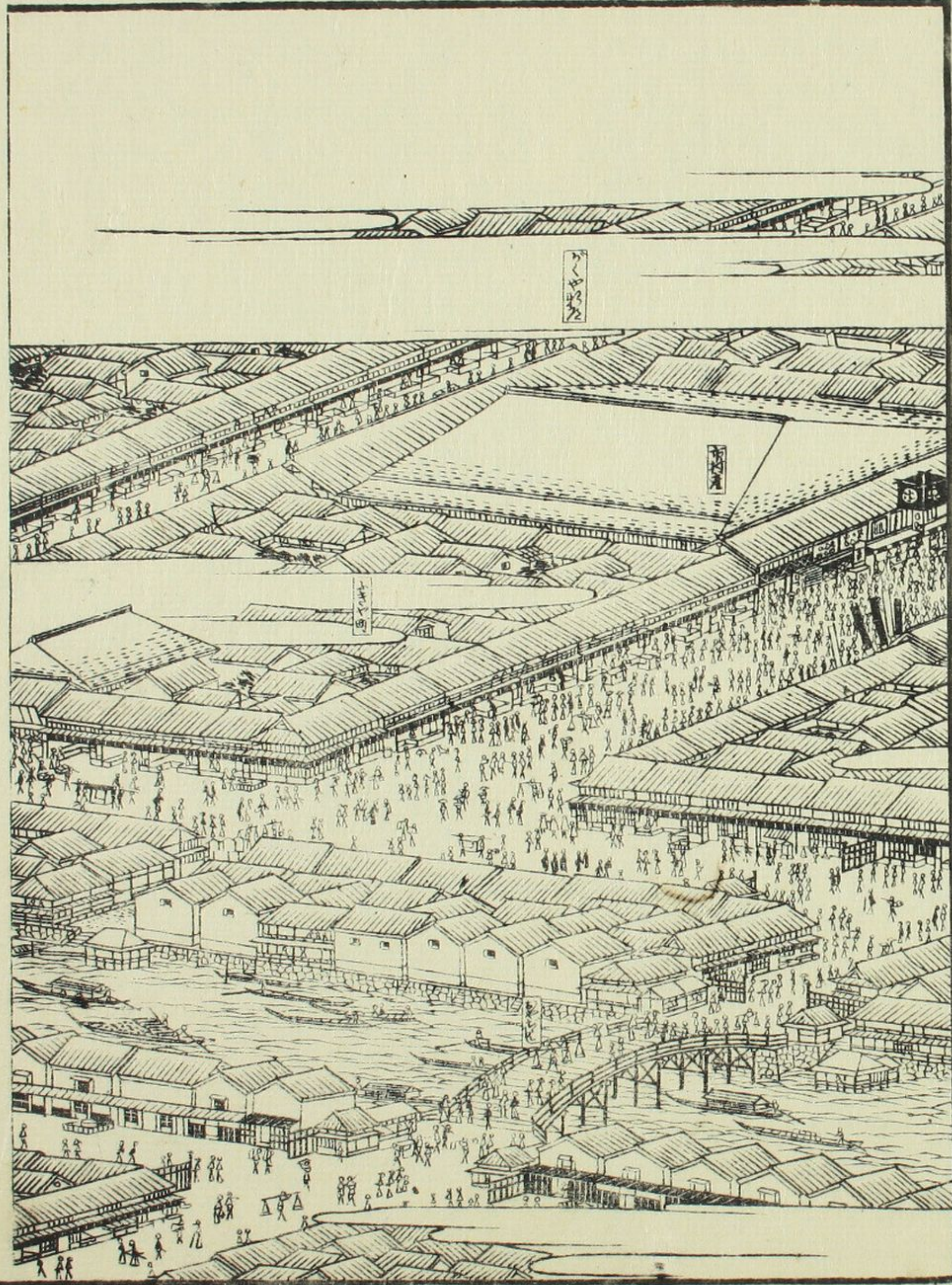
杉森稻荷社 新林木町ありて
相馬の将門威を東國へ送りて

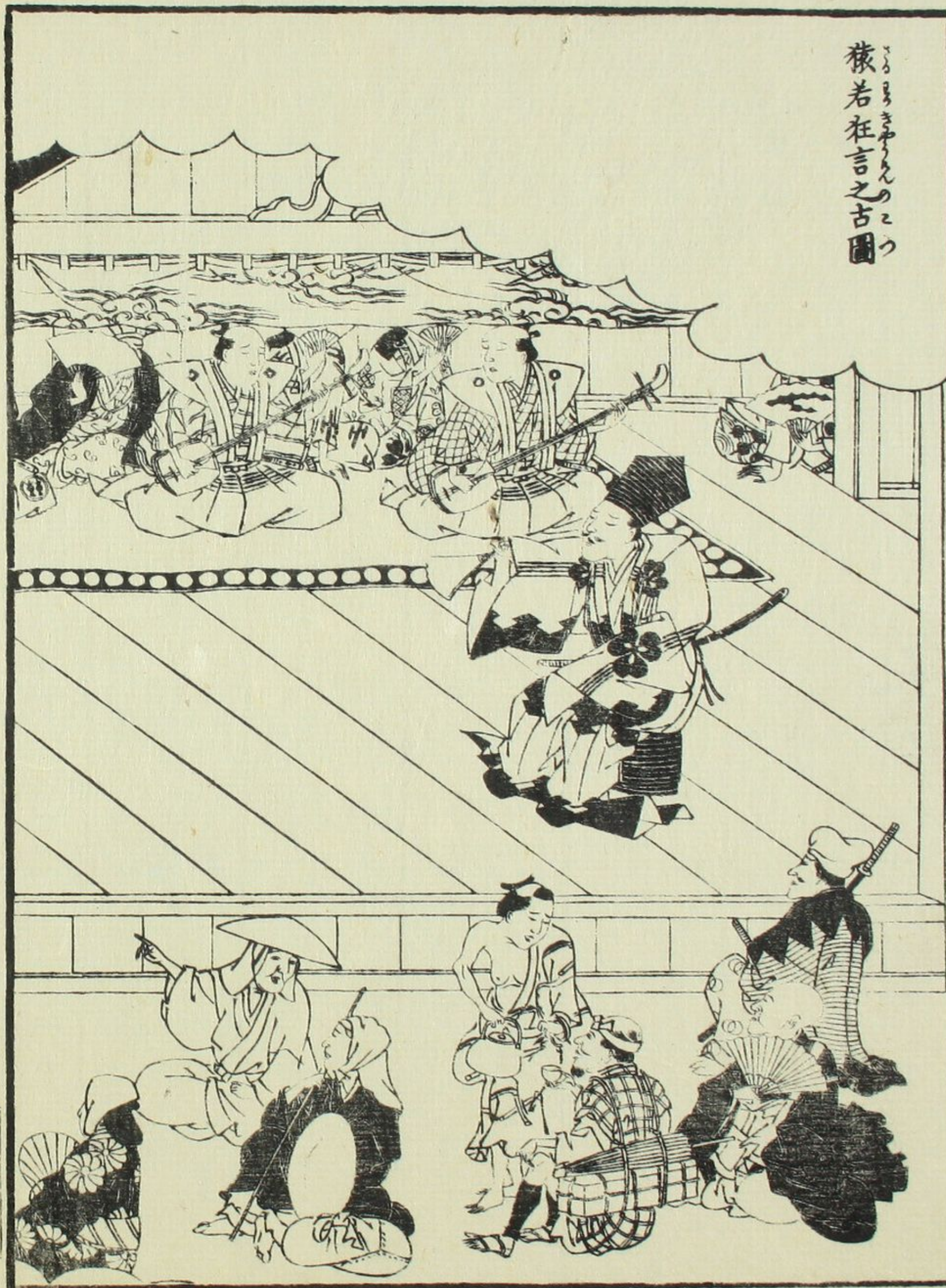
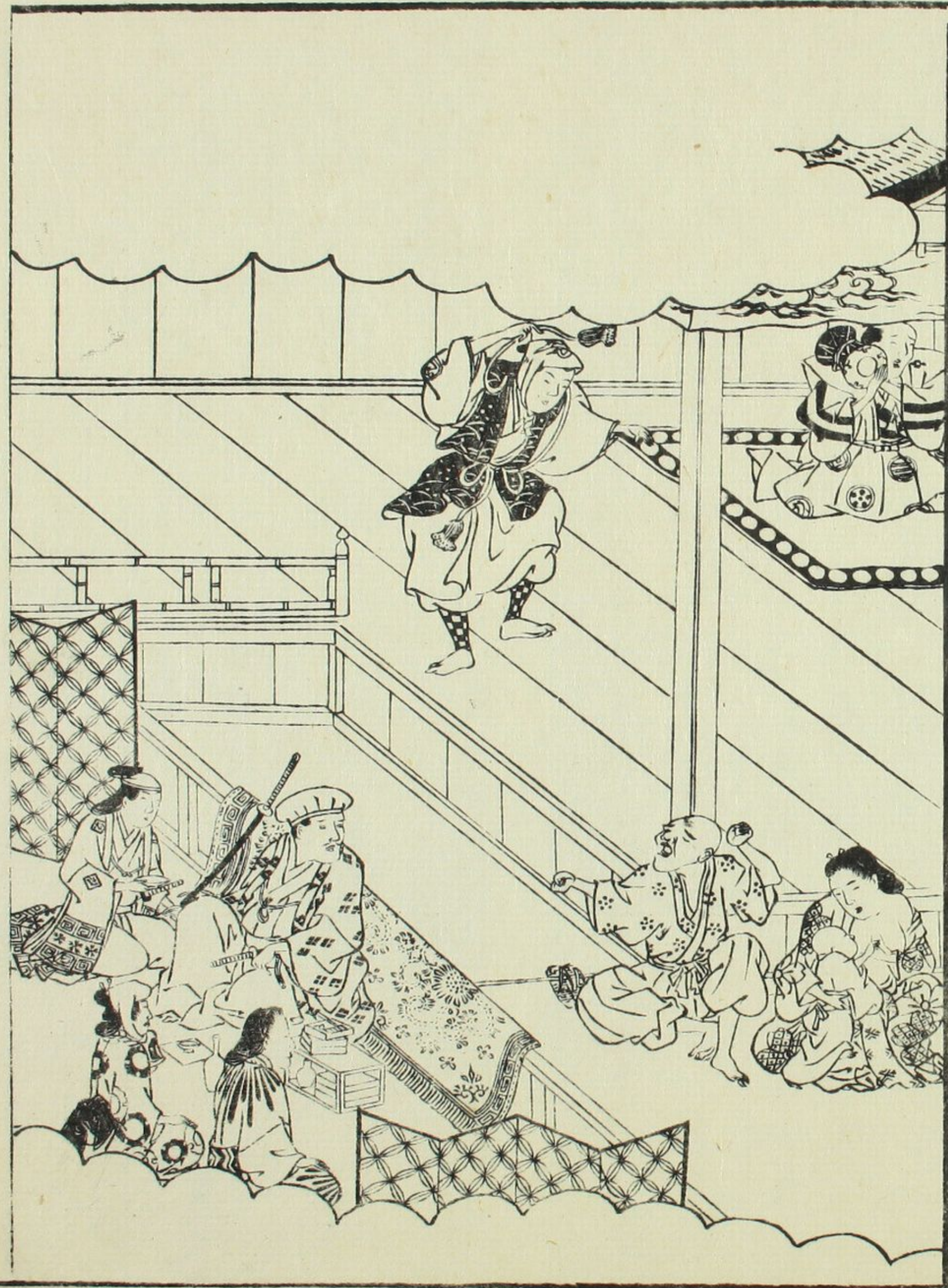
の計策を廻りて此河神の加護に依りて遂に将門を亡し



杉森稲荷神社
すぎもりいなり
 社





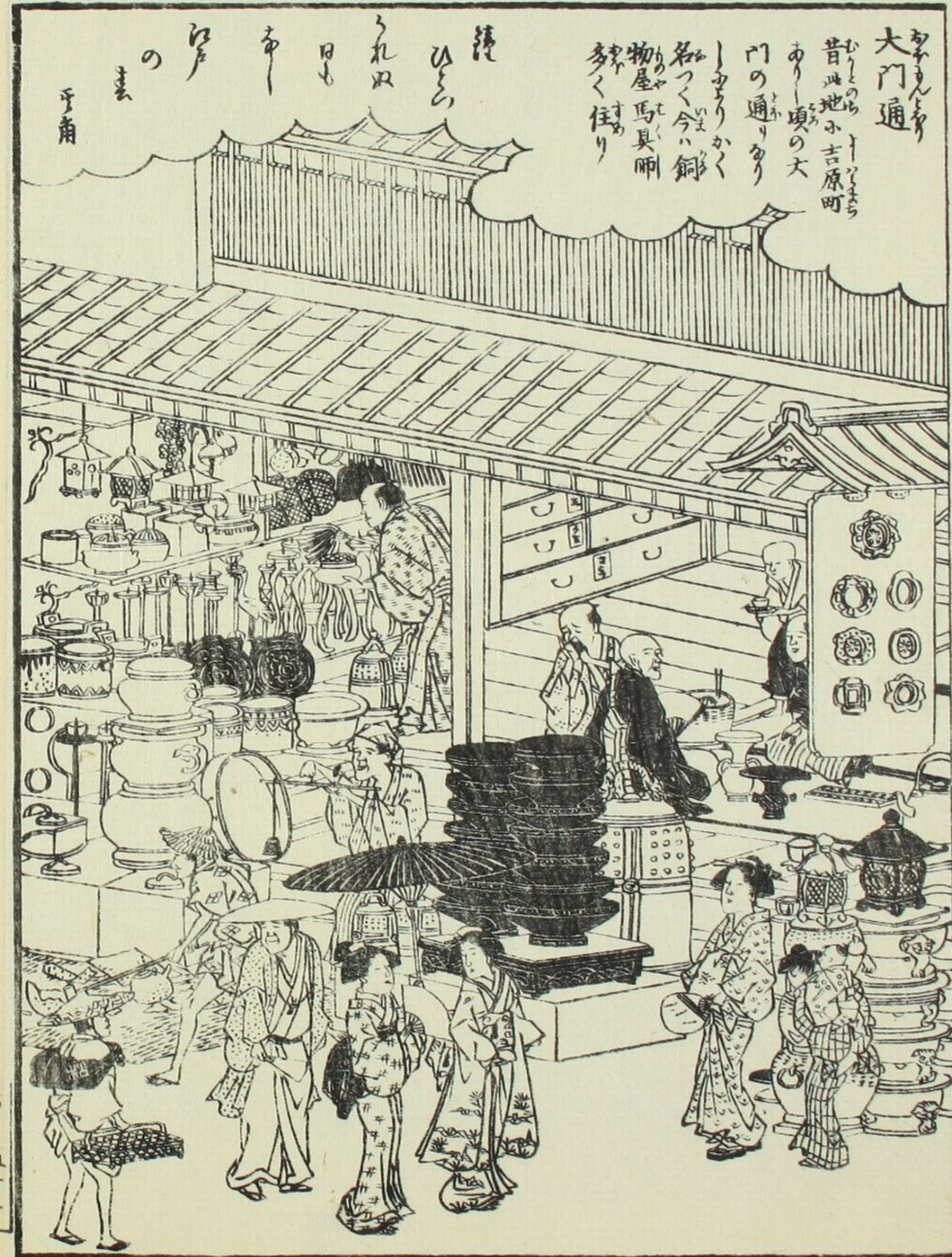
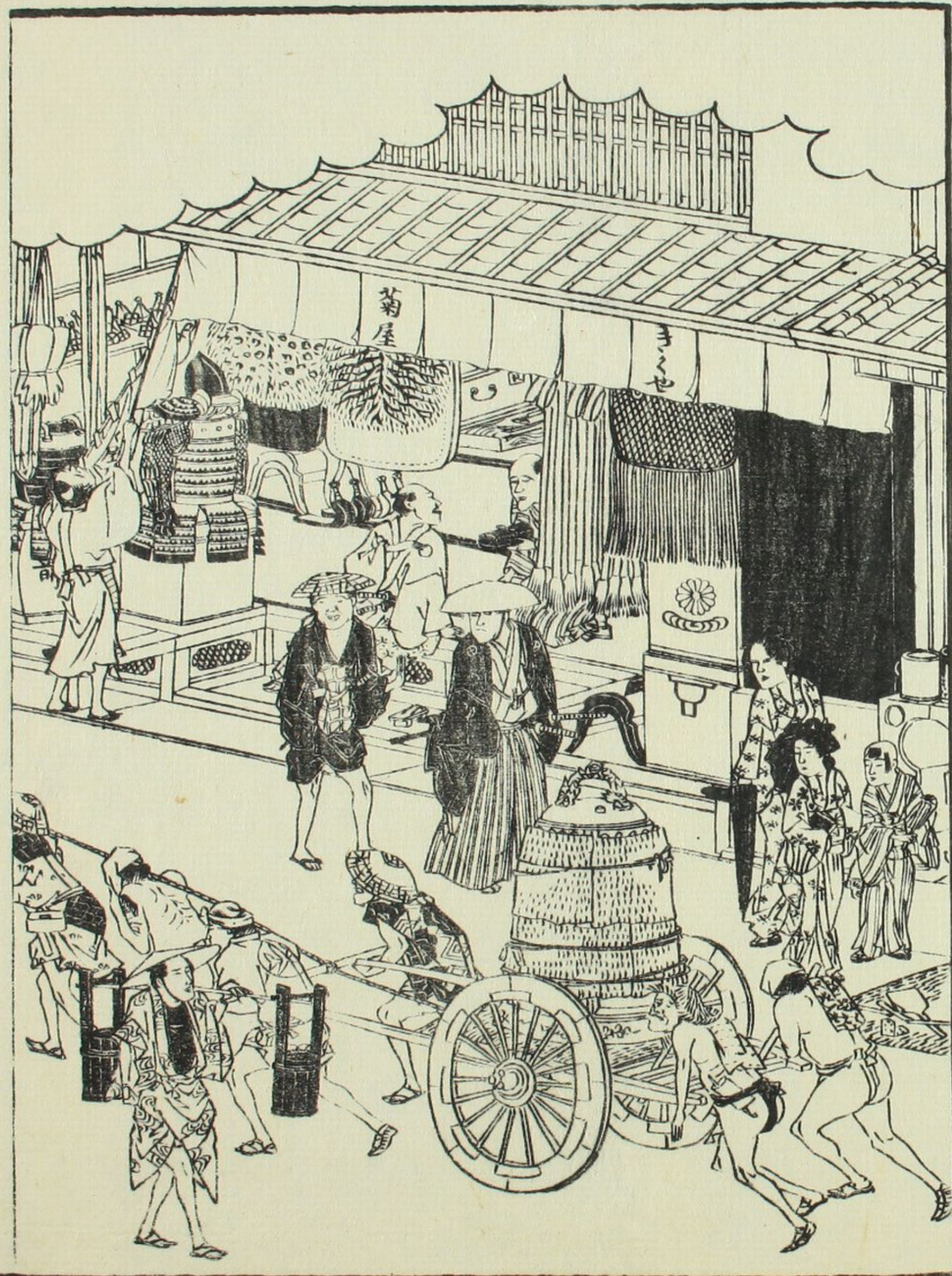


猿若狂言之古圖
さるまわらわいごころのこづ

木挽町五丁目汐入の地へ芝居を取建坂東又九郎と云ふ者の
二男又七と云ふを養子と名を森田勘弥と改む
同本挽町 其餘塚町菅屋町の間操座木偶芝居ありて四時
の下下 元禄開校の江戸鹿子堀町菅屋町の二丁古より操見せぬ又ハ狂
賑りの 説くあつひハ放下の品玉權切の曲を業とせし者とも寄あつたり終日
観承をあると云ふ又江戸名所と云ふに江戸大薩摩土佐の大夫和泉美
浄瑠璃天満ハ大夫江戸孫四郎江戶靴太夫説経鶴屋源太郎南京ありつりあり
と云ふの事あり

吉原町舊地 和泉町高砂町住吉町難波町等其舊地なり
俗稱なり此の河岸と字するハ竈屋多き故の 慶長十七年庄司甚右衛門
との者街と一所又定めあり度旨 官府は訴へたり一加ふ
初て此地を賜り花街とす 往時慶長の頃迄ハ江戸は定ま
たる傾城町もあく二軒三軒つこかこ散在せし其中軒と
並へりハ麴町八丁目あり十四五軒あり何れも京六条より
近る又鎌倉河岸あり十四五軒大橋柳町あり廿軒あり一と云

此大橋と云ハ今のときハ此柳町ハ駿府弥勒町より移り外伏
見夷町奈良木辻等あり追々大江戸は移り慶長十一年の頃
柳町の地ハ召上り元誓願寺前へ引移り傾城屋とも打寄
相談の上場所取立度由願々れと御免なす庄司甚右衛門
初て同十七年の頃願ひ元和三年の頃ハ竹付元和三年霜月地
形普請出来て商賣せり江戸町一丁目ハ一統の後初て開基せし
ゆ急かく号け同二丁目ハ鎌倉河岸より引京町一丁目ハ麴町より
引同二丁目ハ追々来り上方の傾城屋を置し一兩年やて
普請悉く成就せりハ新町と名付り角町ハ京橋角町あり
うの寛永三年に至り五町全く家居落成し此に移り
然し明暦二年浅草の淺今の地へ遷りしをヤリしこと
とも明年引移り度由の所翌年五月十八日の大火は焼亡す
依て同年六月悉く元吉原の地を引拂同年八月今の地へ移り



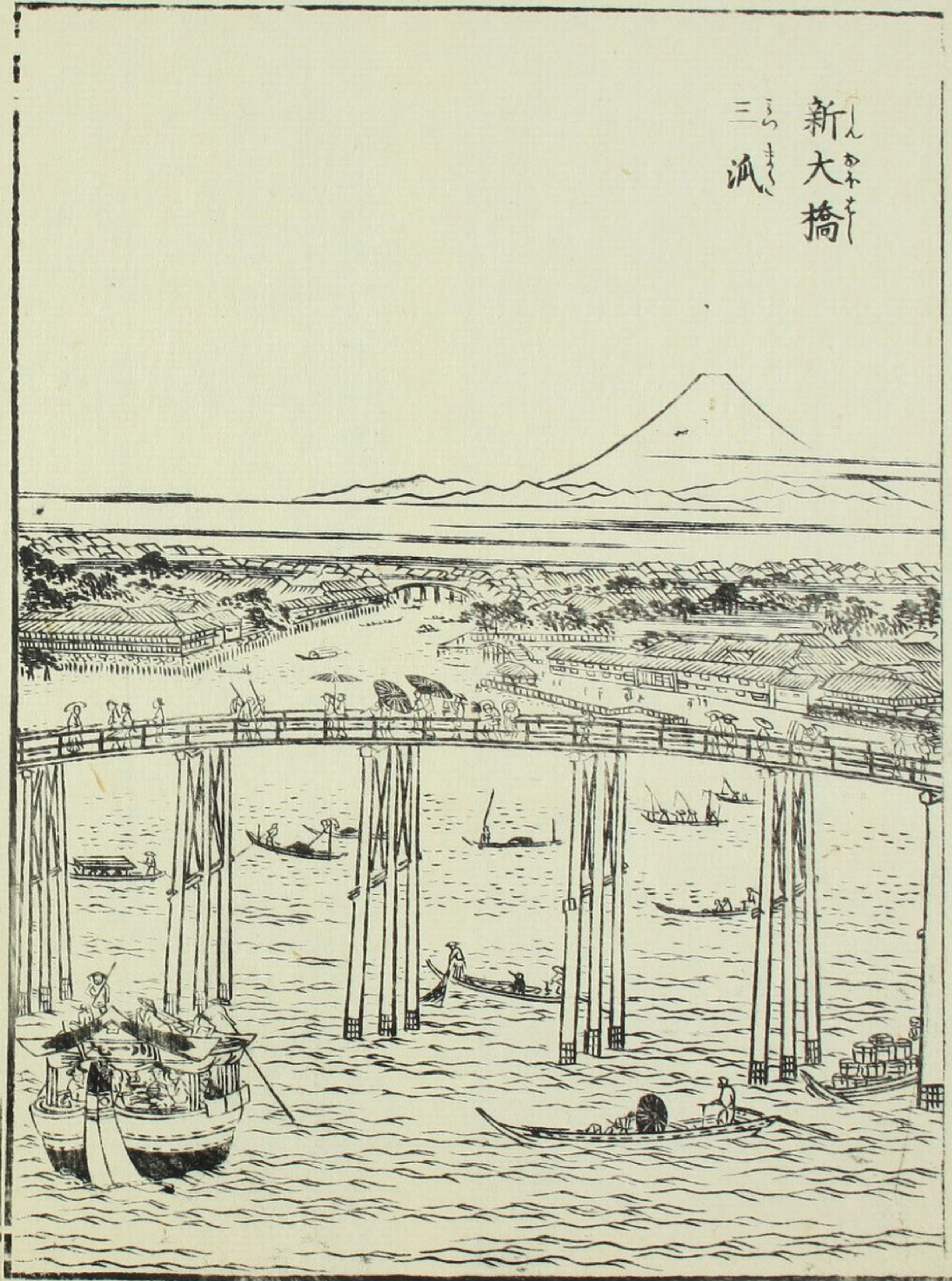
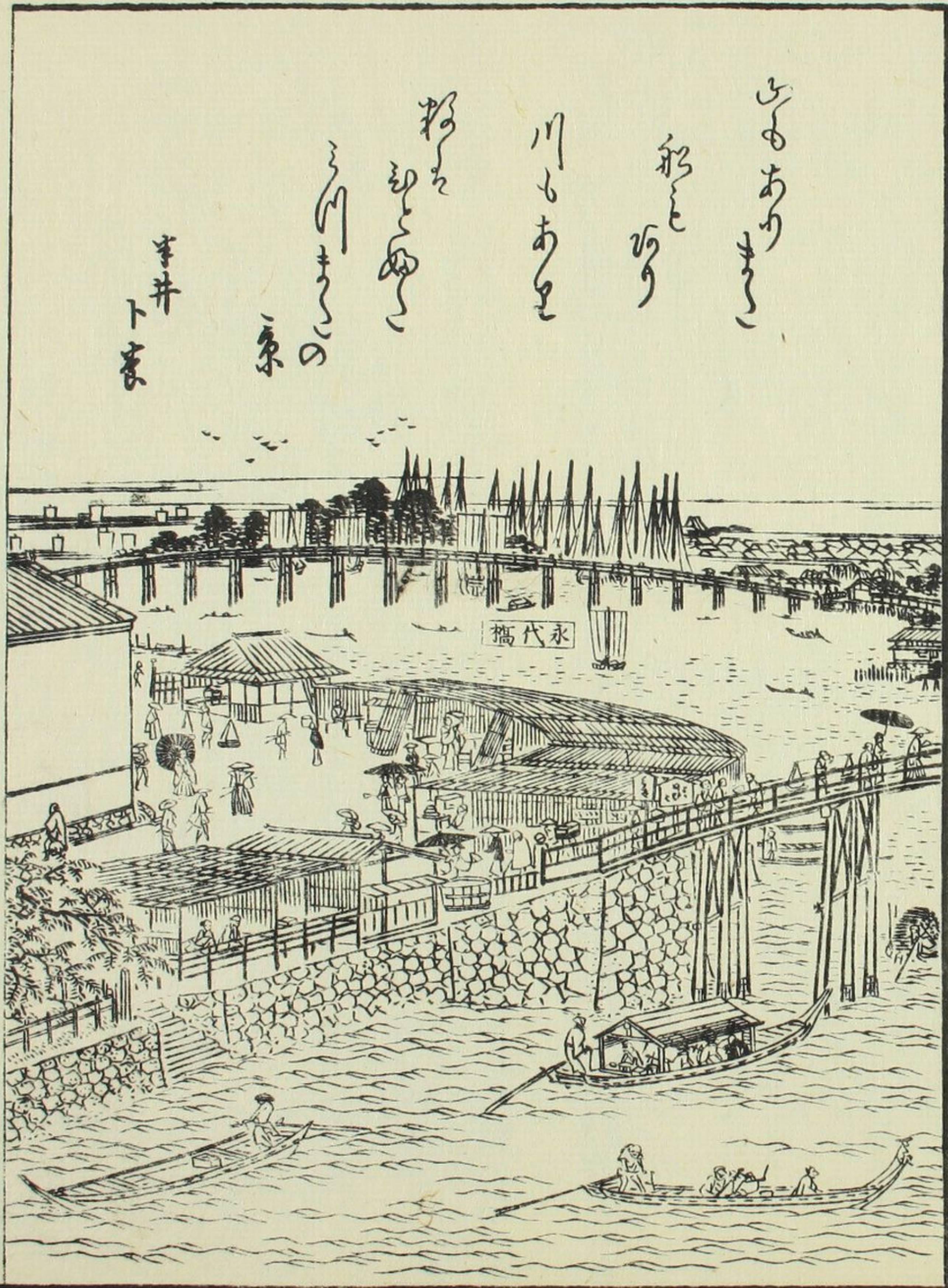
大門通
 昔此地小吉原町
 あり一頃の太
 門の通りあり
 名づく今銅
 物屋馬具町
 多く住り

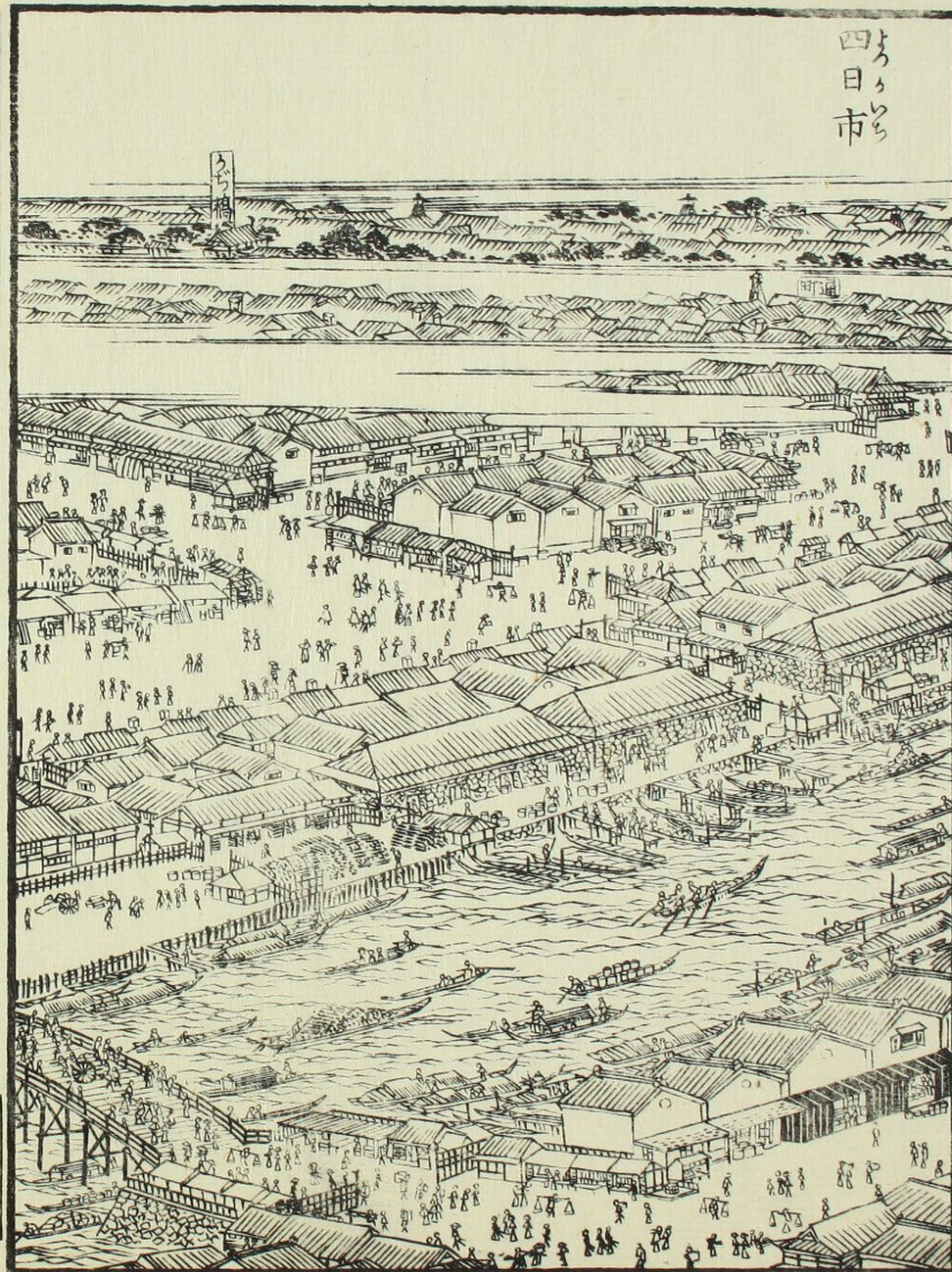
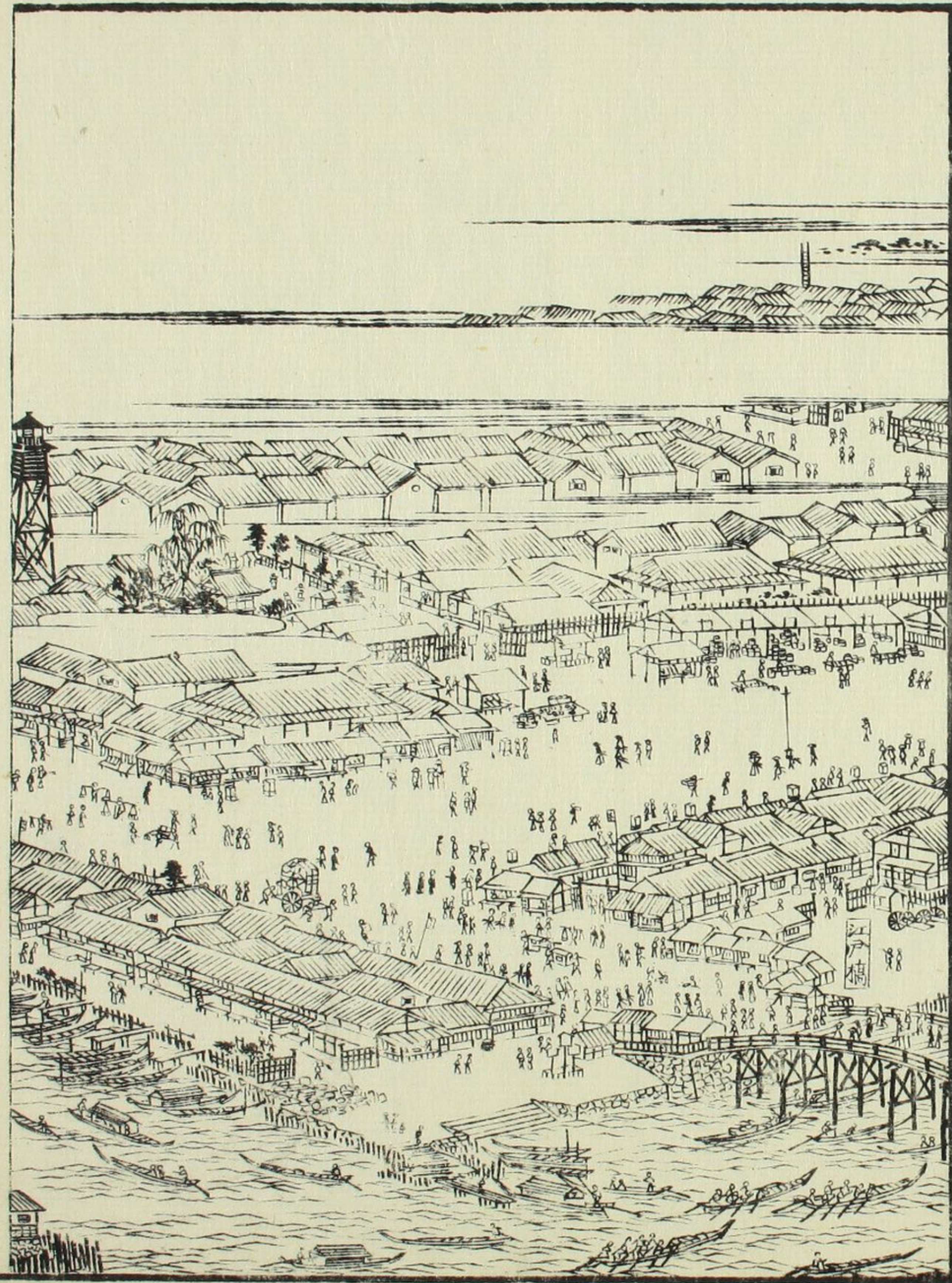
清
 ひと
 うれぬ
 市
 の
 ま
 手角

普請の間今戸鳥越山谷の間は借宅として渡世せり
ゆきたる花街今は舊地に在るハ戲場相接一滋繁昌と極
る事と祝融の崇弥志々のうへ一志う小彼地へ移され
おほやけの御恵いと有難き事あり

賀茂真淵翁雨居地 濱町より
寶曆十四年此地へ入り住
家集るる事あり 真淵翁一に

岡部衛士又ハ縣居とも称せり賀茂縣主成助の末葉にして世に洛北
賀茂大神の宮司より同師朝の時文永十一年甲戌遠州濱松庄
岡部郷なる賀茂の新宮と齋まつる事詔を蒙り又彼地を賜
其宮の神主となす即岡部郷に住せり翁ハその後裔定臣といふ
子少く元禄十一年丁丑彼地は生る壯より深く國朝の学に心
あせ享保十八年癸丑花洛小至り荷田宿称春満の教を受け後
大ニ國学を以て世に鳴り荷田宿稱ハ本姓なり世に羽倉翁宮寛延三年
庚午大江戸小来り田安の殿の召不應古への書の道の博士とい
持よ愛させあひて項沛衣を賜り一ハ其かこまり小和奇をせり
あひてふりあひて沛衣を氏人のかつらむものと辨やありん
其後宝曆十年庚辰仕をわへて暮り濱町に隱栖を翁を縣居
と唱ふる庭と田居の様よ作らるる賀茂氏の姓も縁ありん
とてつゝ家の号も呼れしとてつゝ生涯の著述九六十餘部其





三河万葉江と
 下りて毎朝松月
 末の夜日本橋乃
 南法不集りく
 抱ゆるり尾と
 文彦市といふ



在人間外 長嘯高吟雜掉歌

人々よもあつて八月の十日秋三浦ふと
 うらうらと船をさるるに舟に舟を繋ぎ子の
 年十六なりとて

又々々人々二八の十日秋月とてまゝあるものをい ト養

のありありと海もわりの川も海を扱ひて海を治るる事 全

江戸橋 日本橋の東よりありて伊勢町より本材木町へ竹間架は

南の橋詰巽の角は船宿あり江戸の内諸方への船場あり又

同所西の方木更津河岸と字を房州木更津渡海往還の

船々集りあふ名とす

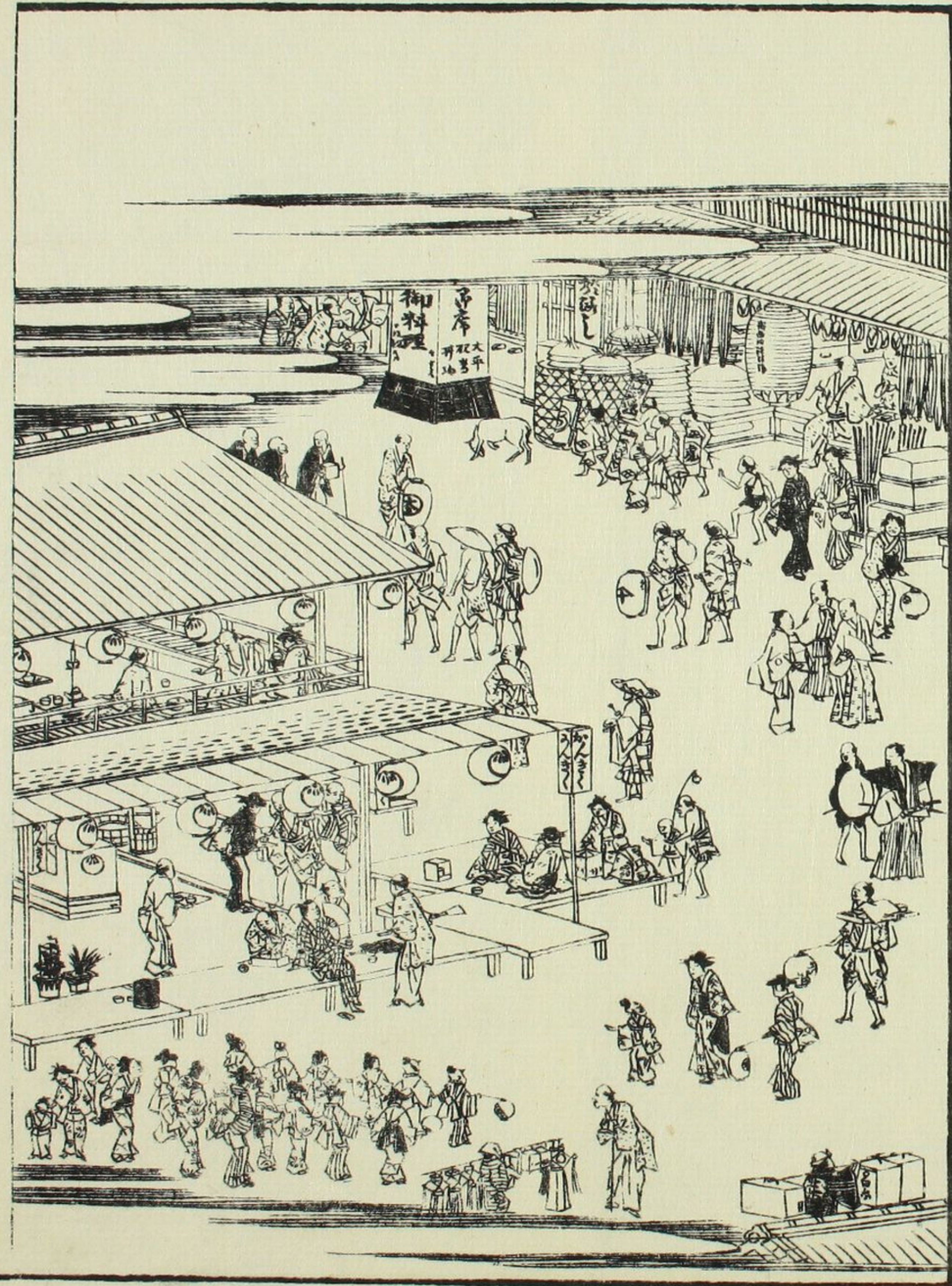
四日市 江戸橋と日本橋の間川より南の方の大路を云昔八日市

場とのひ村ありて今繁華のやまなりなれは萬の賈

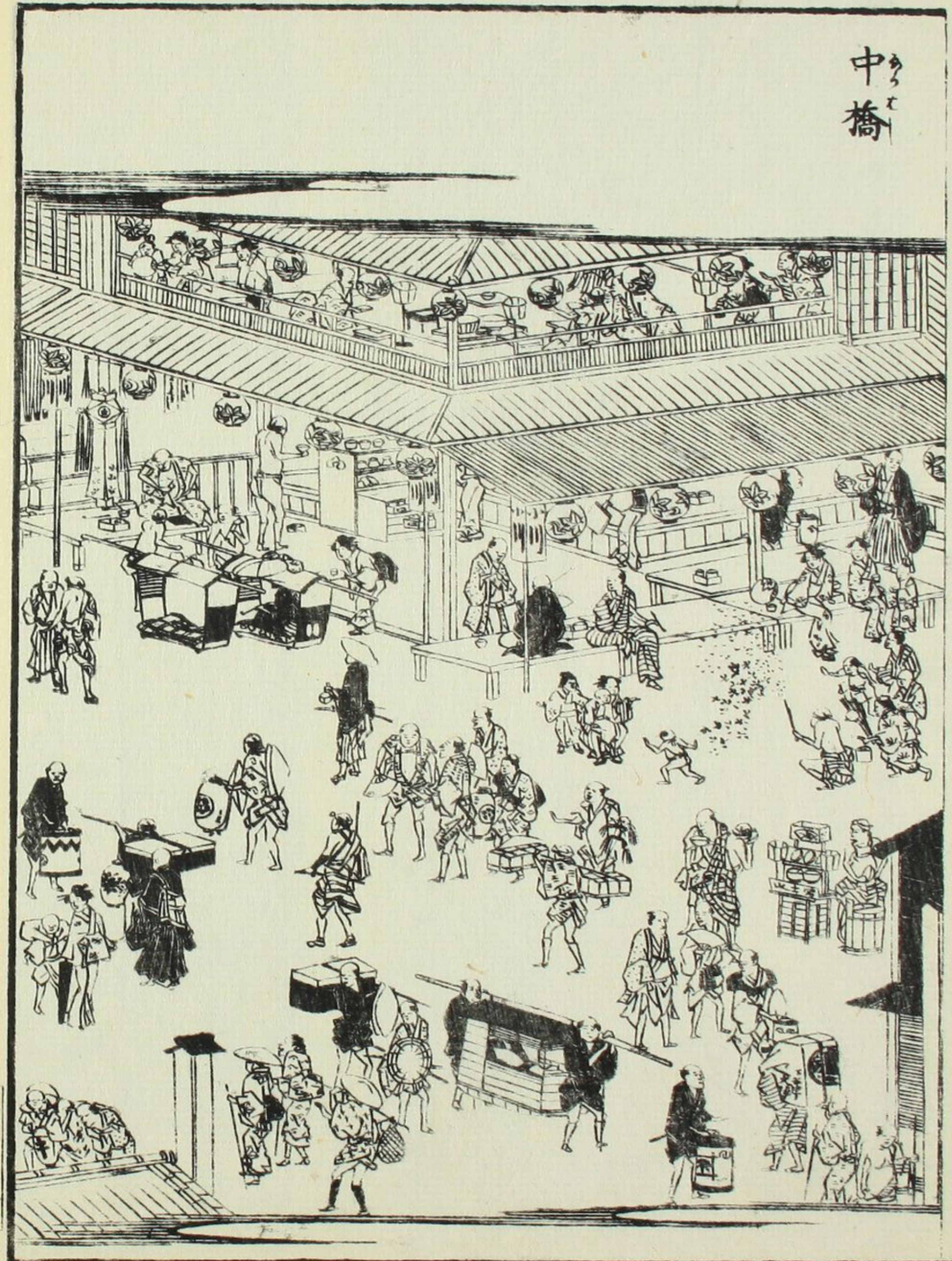
街も市をなすて交易せられは得るに成るに云日市と

立る區を名つけ某日市と云羽州のありて二日市と云より

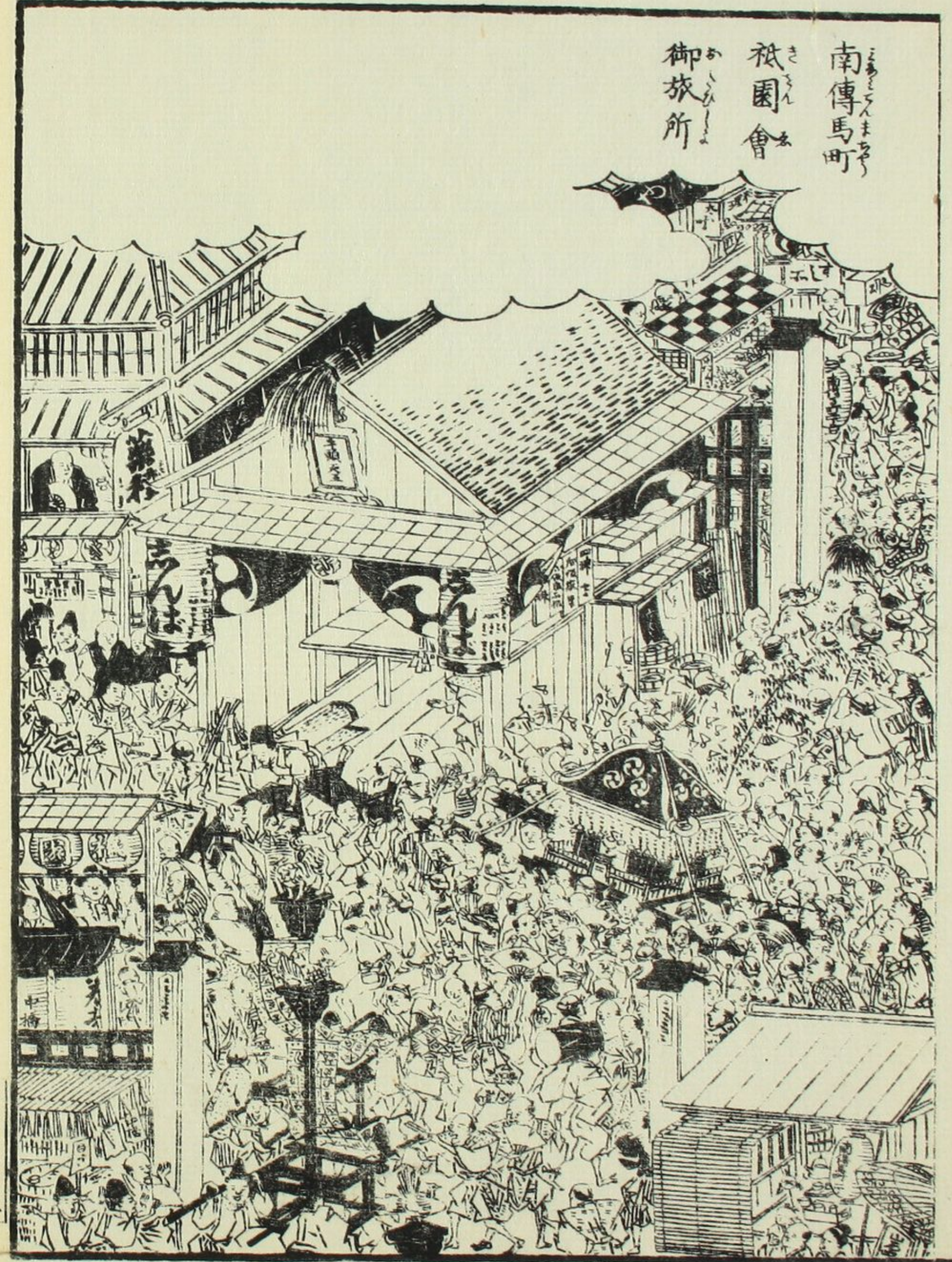
十日市と云近區の名小はき交易せり此地も昔ハ毎月四の日ハ



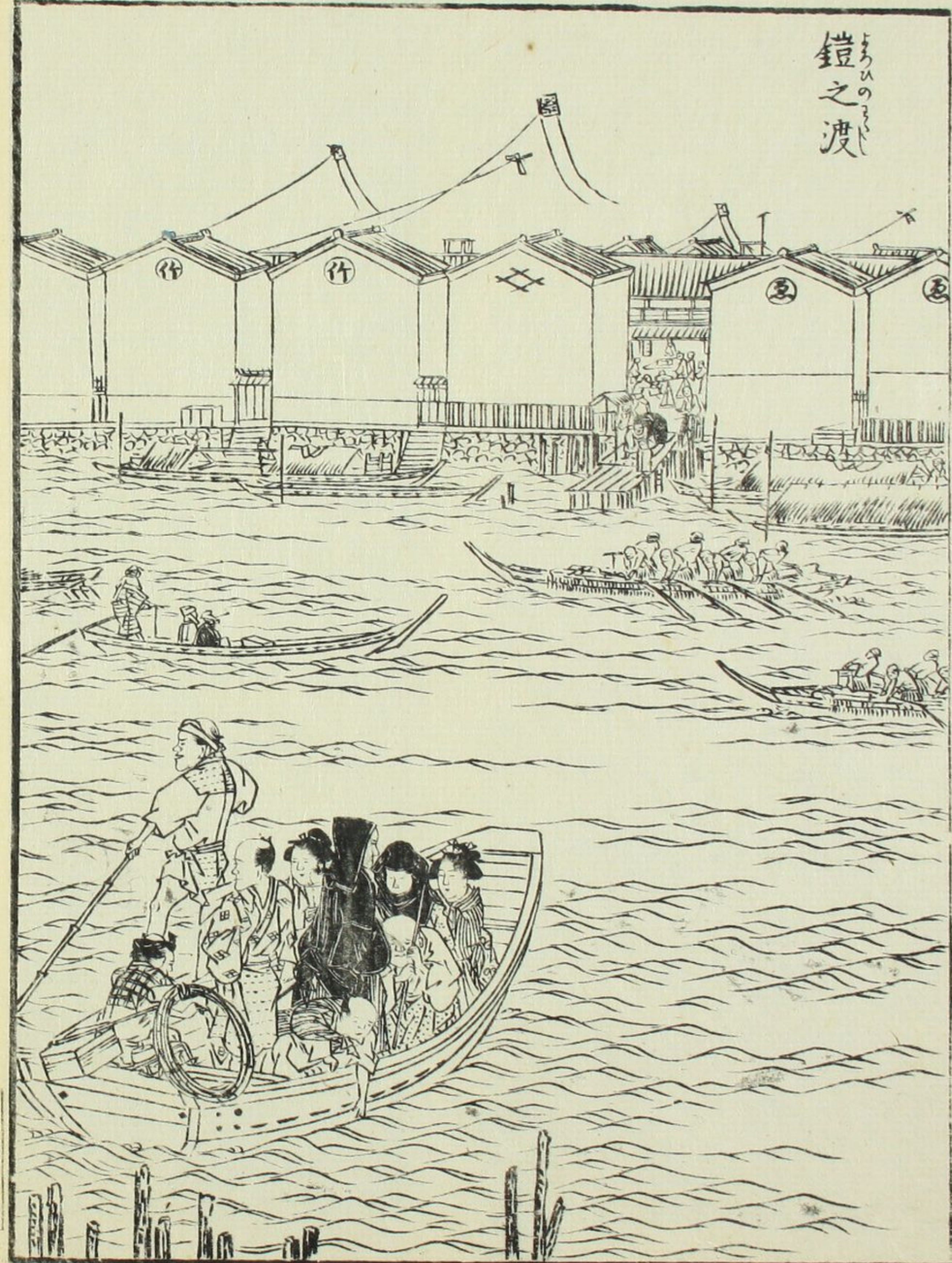
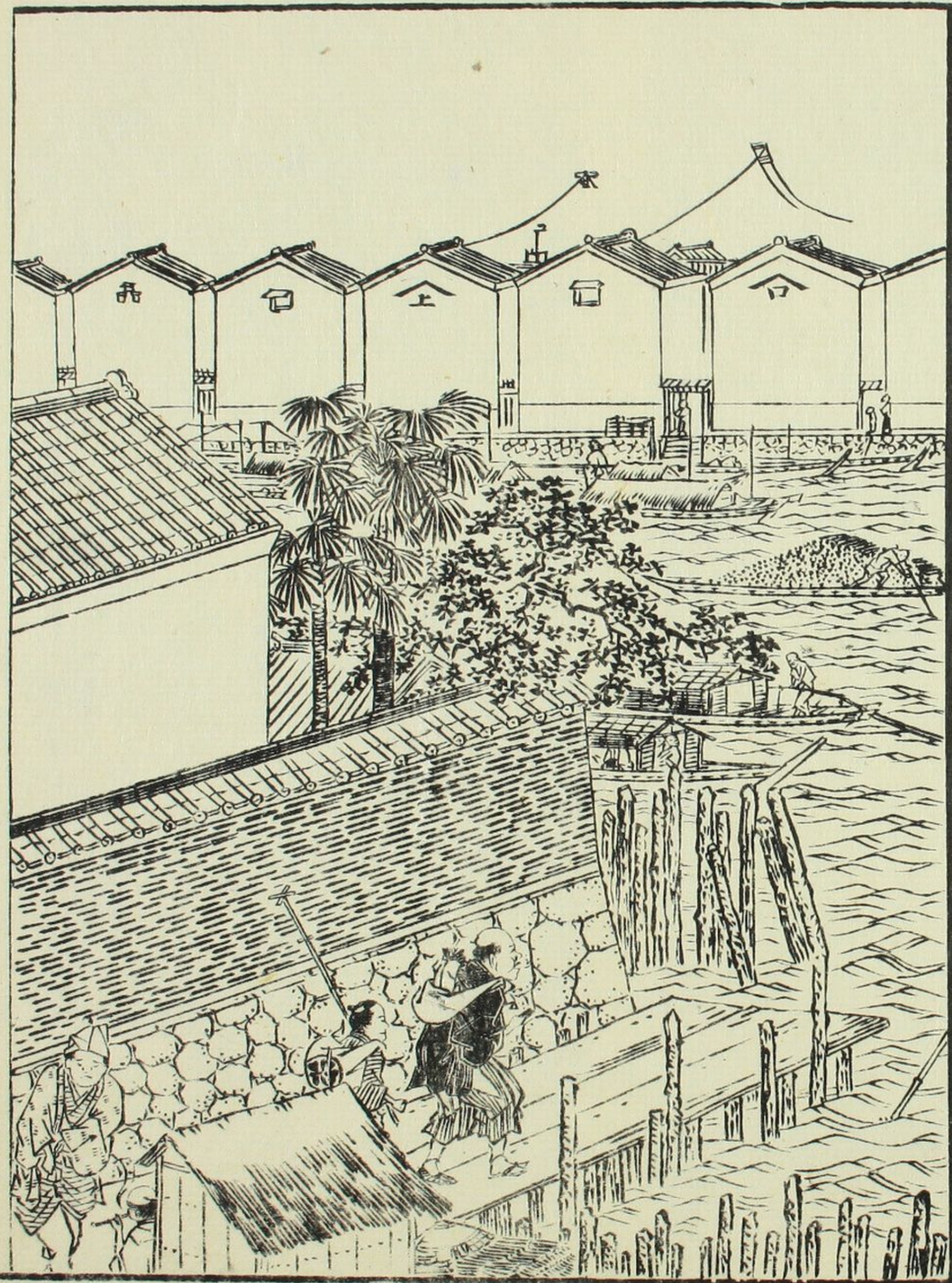
中橋

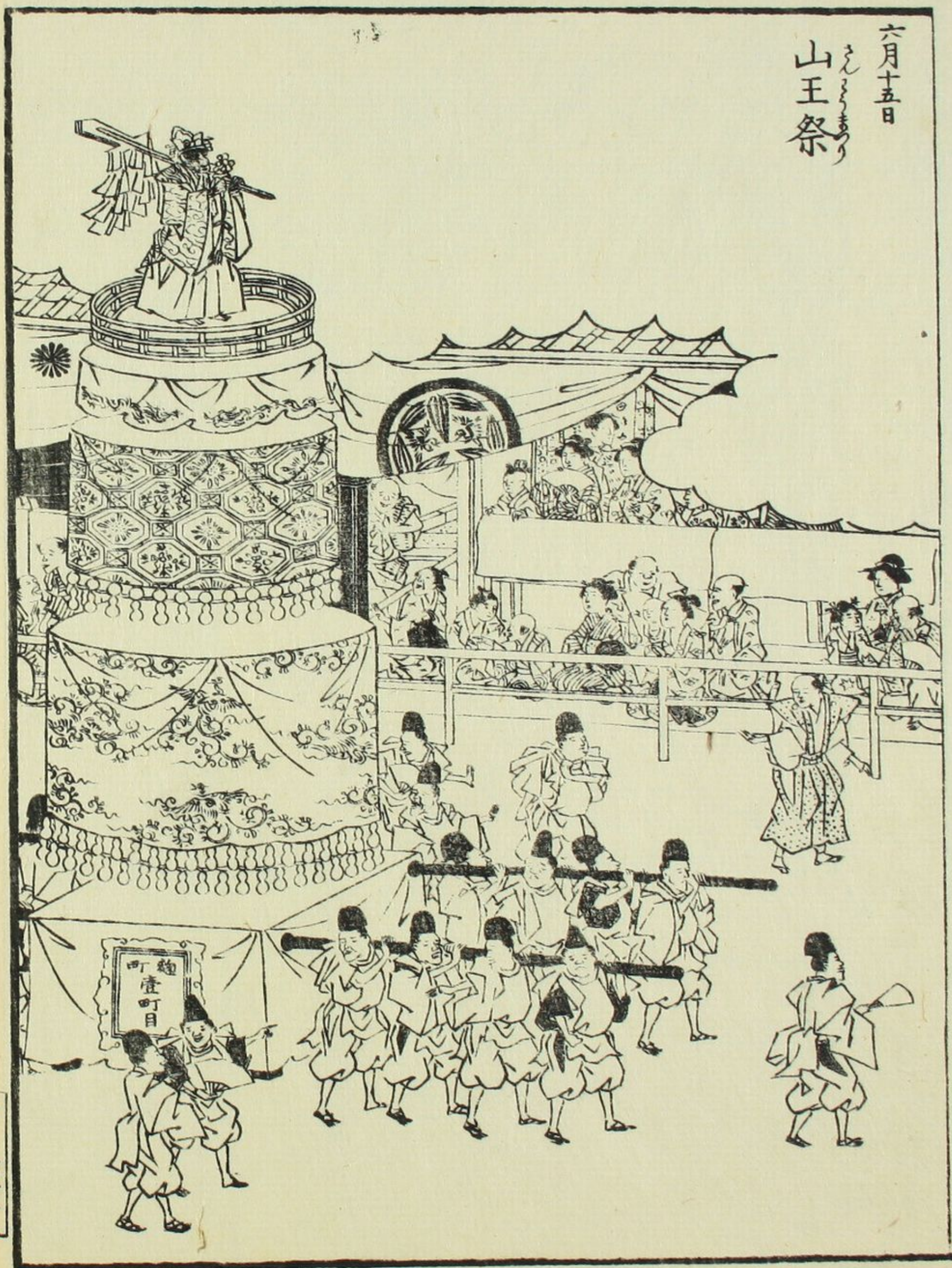


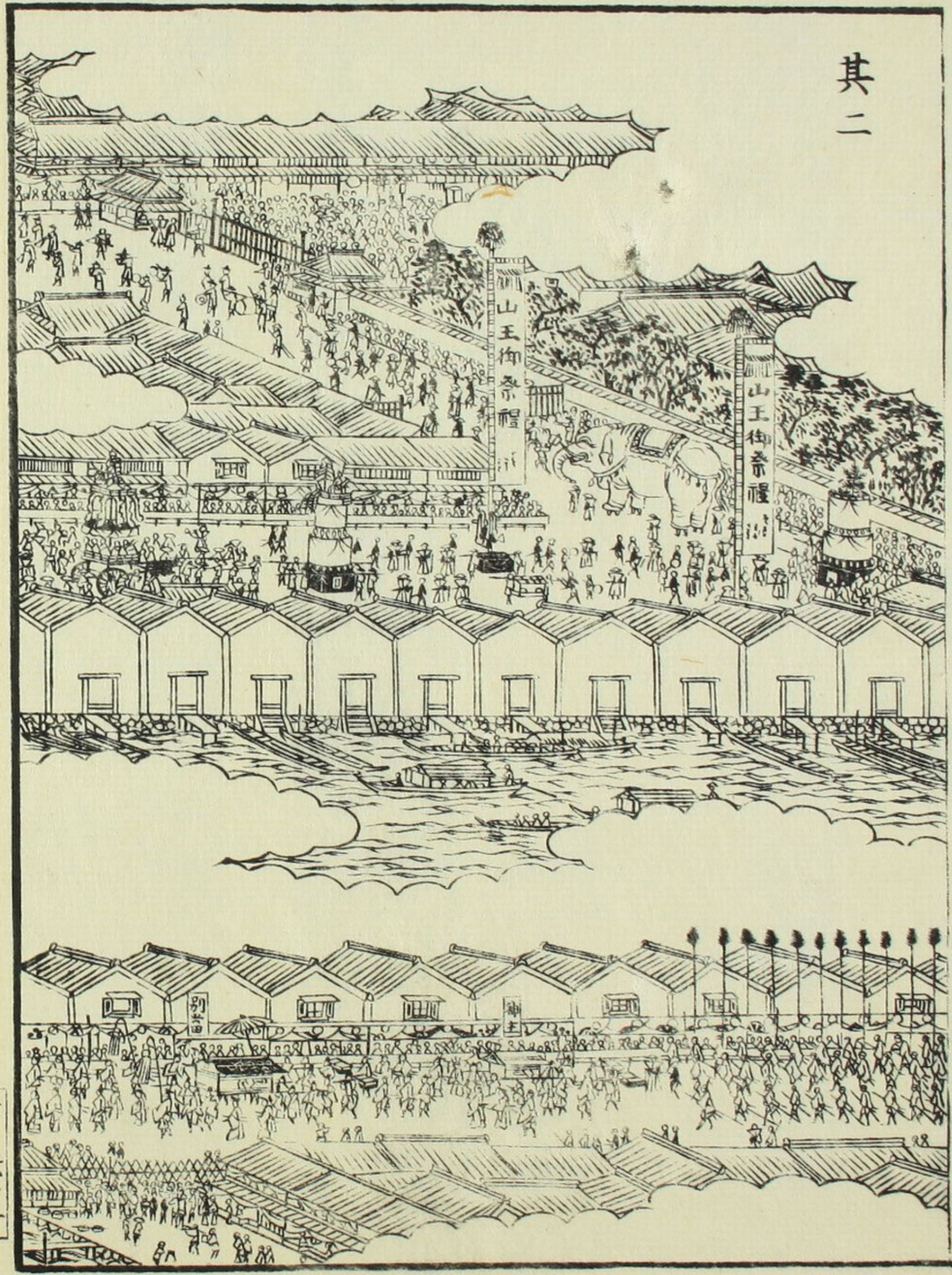
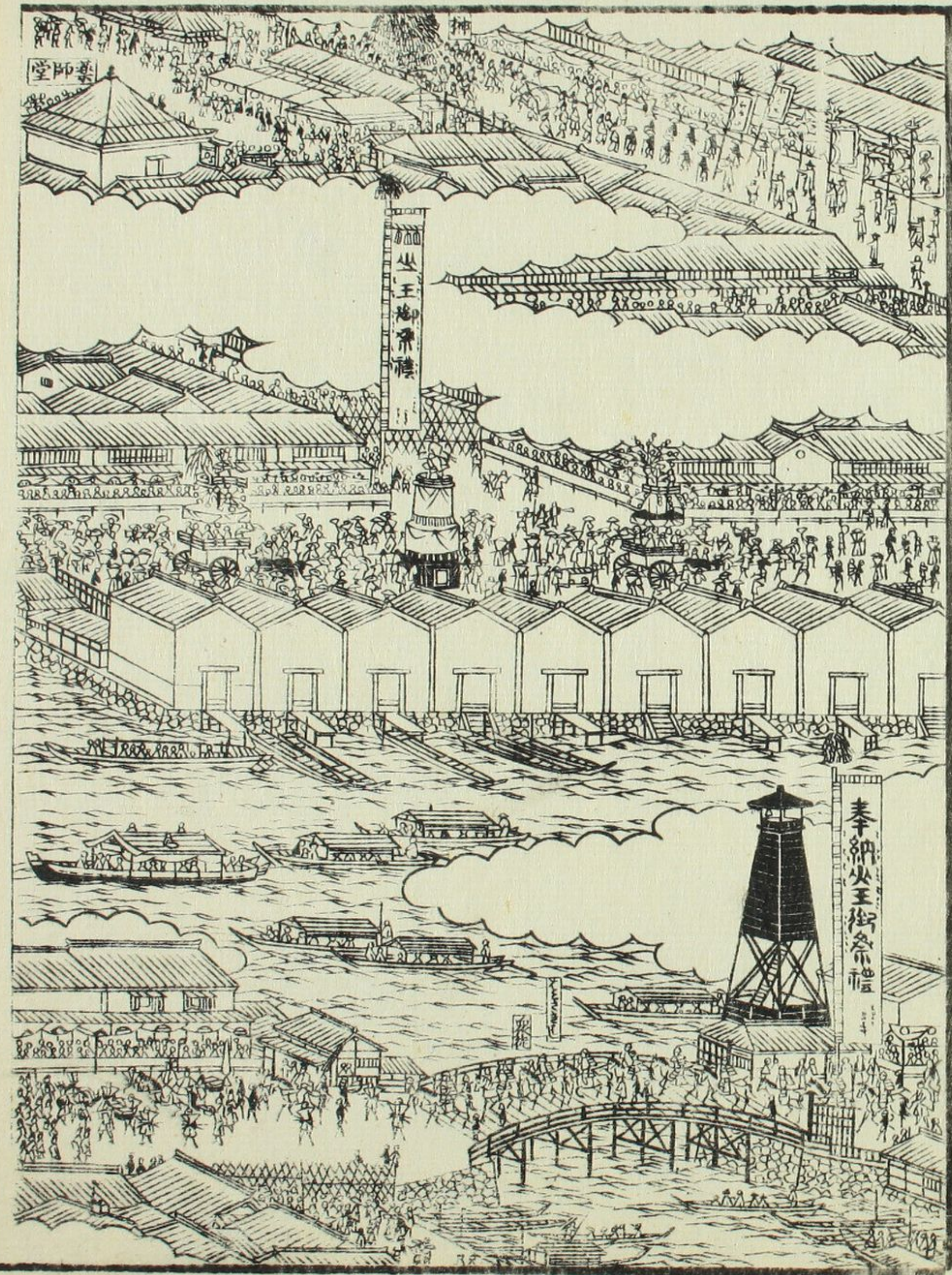
南傳馬町
祇園會
御旅所



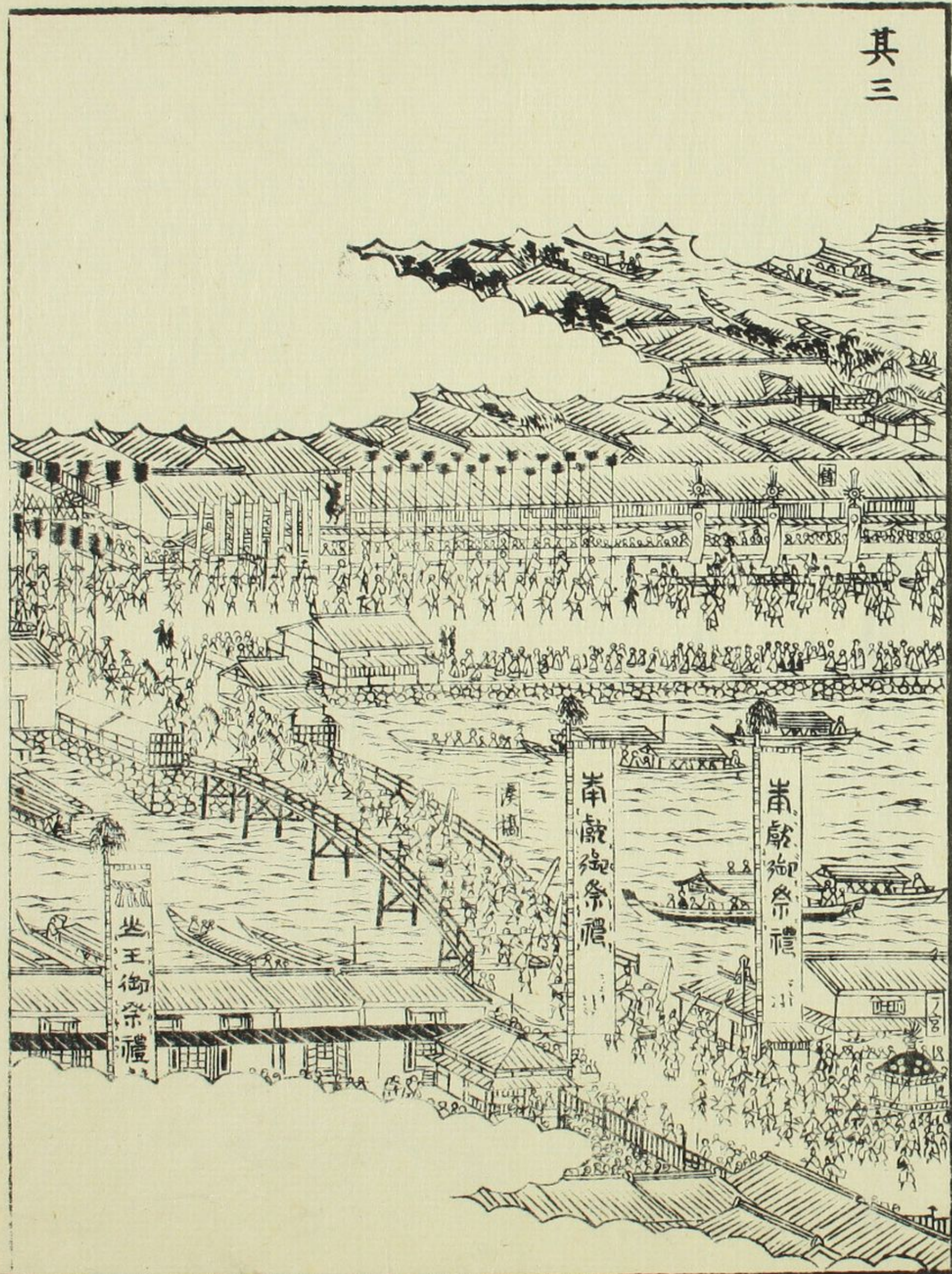
市を立しおなりとそあふ今も其遺風あく草物又ハ野菜の
 類ひ其余乾魚などの市ありて繁昌の地なり此地に根津
 権現の涉旅所あり 正徳年中中造 同所河岸に傍く封疆蔵
 あり下より石を以て畳揚上小家根を覆ふ 明暦間極のむじあふ
橋の南萬町より四日市迄の佃屋を取除け高と四間川端
北よりけ東西二町半より土倉截と置あけらると云く今君岸島より四日市と
とる所家ありを此所
 祇園會旅所 南傳馬町一丁目と二丁目の間の辻あり本社ハ神田
 明神の地あり祭所素盞鳴尊中して是を大政所と称せり
 毎年六月七日ころは神幸ありて同十四日帰輿一なる其間恭詣
 多く甚めをいへり
 鎧の渡茅場町牧野家の後を云此所より小畑町への舟渡を
 あり唱へり 往古ハ大江なり 一と名を里諺云永業年間源
 義家朝臣奥州征伐の時此所より下徳國に渡らんとせ時



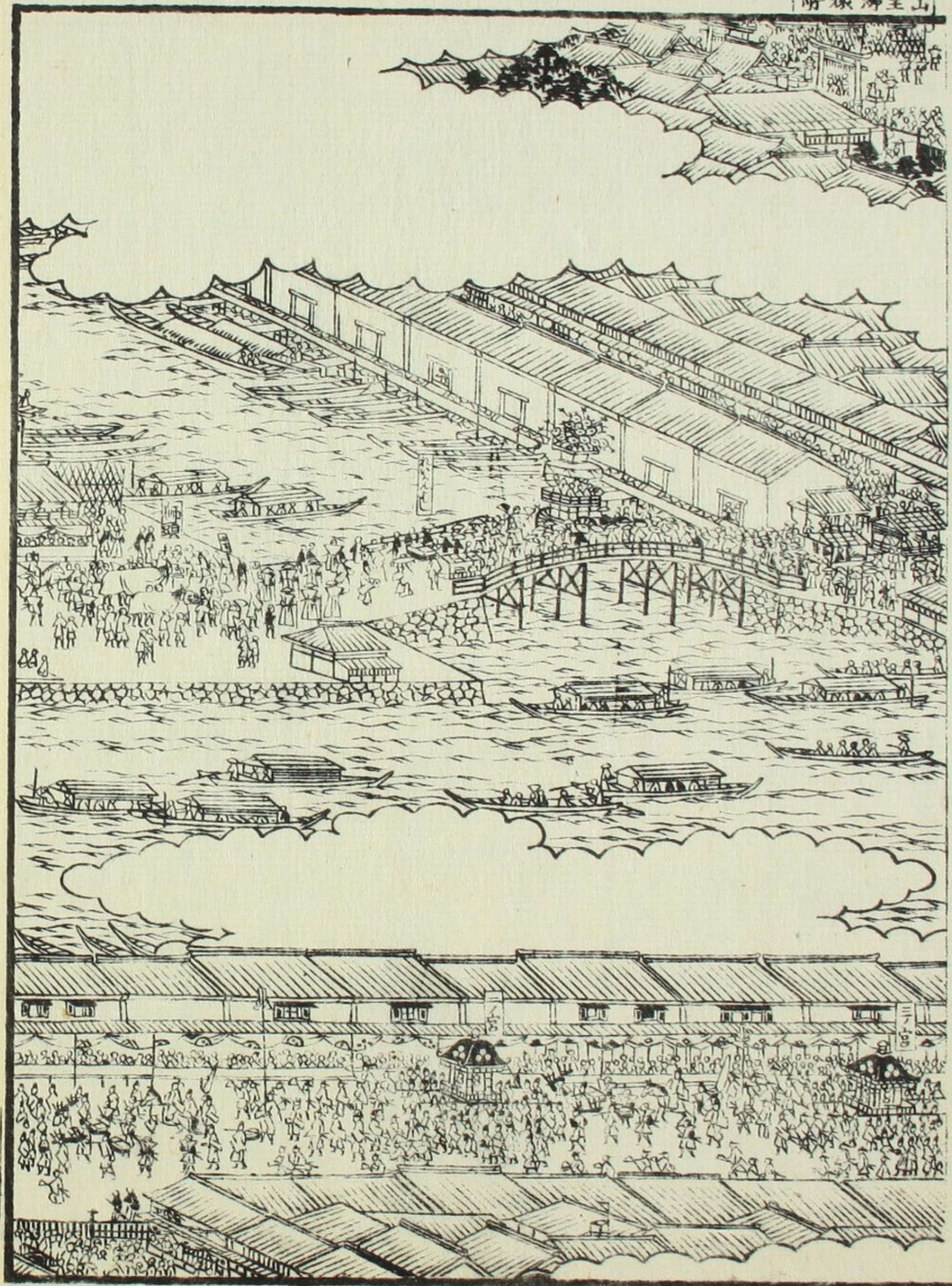




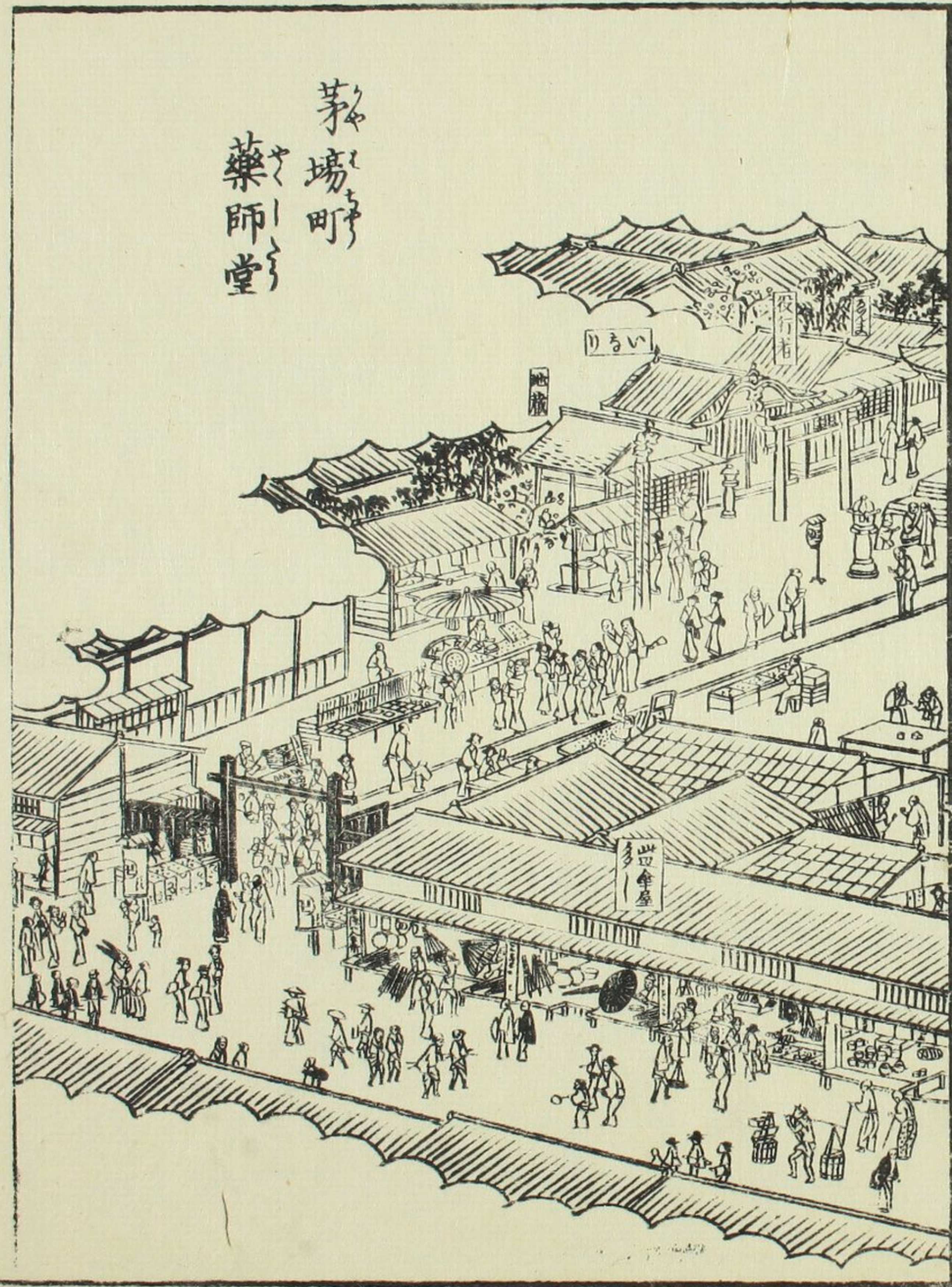
其三



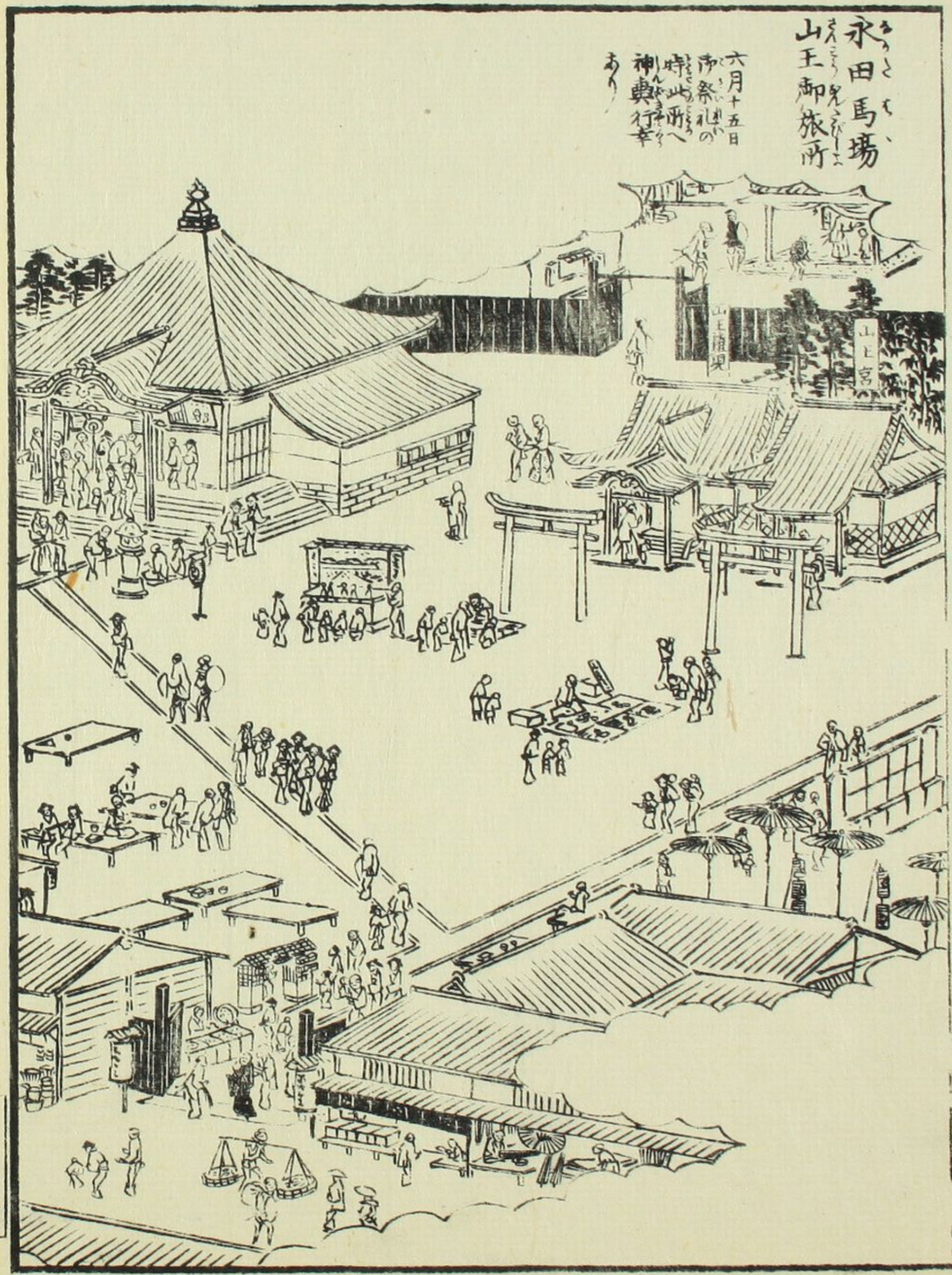
山王御祭禮

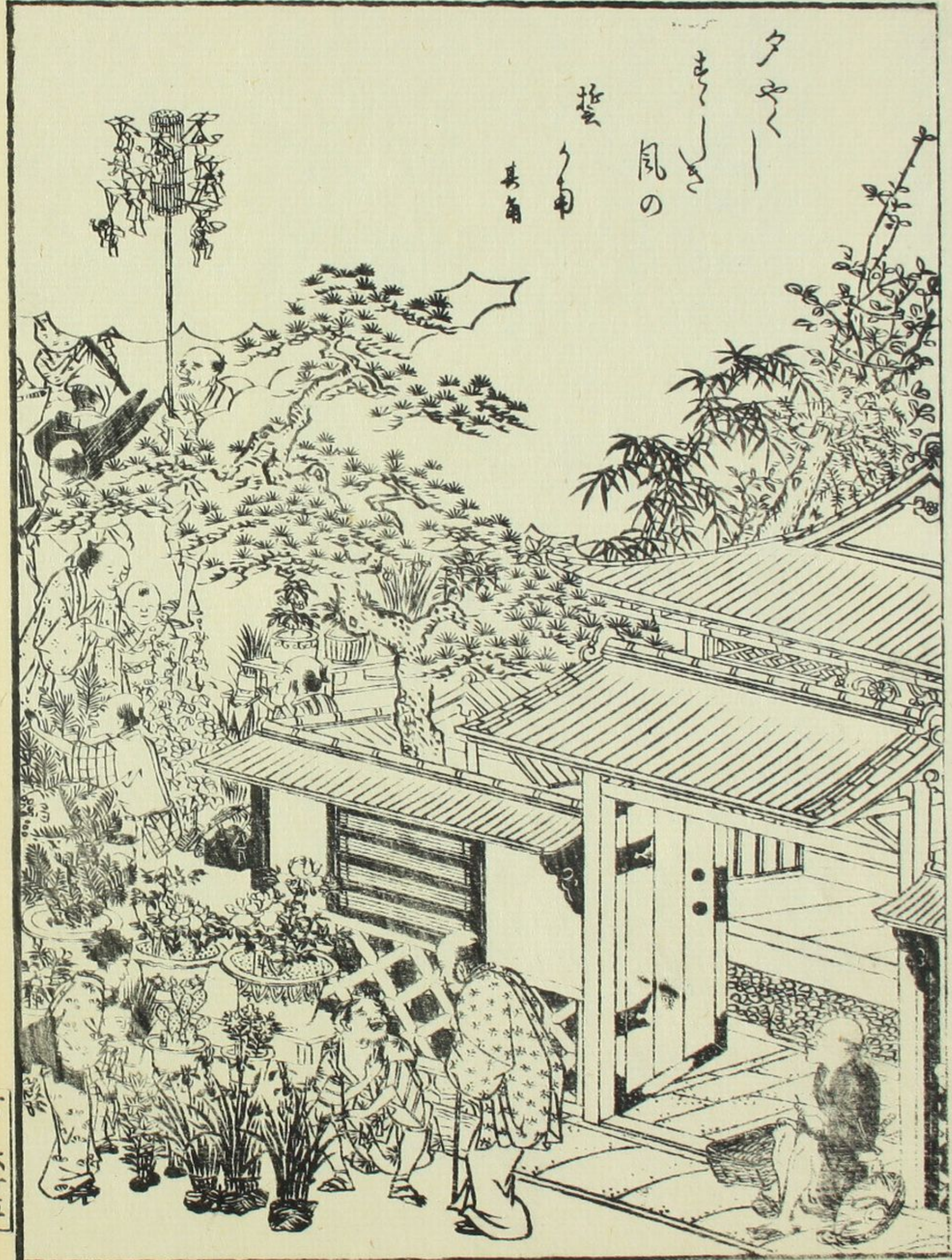


菰場町
薬師堂



永田馬場
山王御旅所
六月十五日
伊弉諾の
時此所へ
神輿行幸
あり





護ハ萱と同一字義ありハ称せられありよのこ此地に住せ
られし知るし

伊雜太神宮 北八町堀松屋橋より一町を隔て良の方塗師町代地

町屋の間にありし當社あり此所を宇土俗磯辺太神宮といふ

伊雜の御神ハ天照皇太神宮の別宮ありし祭神ハ伊佐波登

美命と玉柱屋姫命二座なり寛永元年甲子伊勢長官出口

市正某伊雜宮より移しまねし通三丁目ノ宮社を営り

今神明長屋と唱ふハ則是こ同十年癸酉今の地へ移しまねし例祭を

六月廿六日は修行也

三ッ橋 一ッ所ノ橋を三ッ所架せしあるあり呼ぶ北八町堀より本材木

町八丁目へ渡ると彈正橋と呼び寛永の頃今の松屋町の角ノ島田本

材木町より白魚屋鋪へ渡ると牛の草橋といふ又白魚屋敷より

南八町堀へ架せしと真福寺橋と号するなり

靈巖島 箱崎の南あり町数今十八昔雄誓靈巖和尚此地の海

汀を築立て梵宮を営み靈巖寺と号く依り後世靈巖島といふ地名起り初ハ江戸の中

島とよひしとあり東海道名所記よまの島も江戸の地とあれ東の海中へ築せし島なりと云云後世寺と深川へ移

されしを跡を町家と名しあり故に此地の北の通りあり

茅場町へ渡る橋を灵岸橋と号けり

隨見屋鋪 同所新川一の橋の北詰塩町の辺其舊地ありし

此所ノ瀬戸物屋多く住せり茶碗川村隨見ハ諸國の水土を考み

鉢店とも号く或隨見長屋ともあり諸國の水土を考み

其小精し大よせは勲功あり海を築き川を堀田畑開

發せ河内國の水を落さんとて摂泉の堺は大和川を堀淀

川の溢を治んとて大坂よ安治川を鑿隨見自らの実名を安治と

其土砂を以て川下よ新よ山を築き洪水の時高波を防除くも

るをせし目當とす世に隨見山と稱せり其餘の功

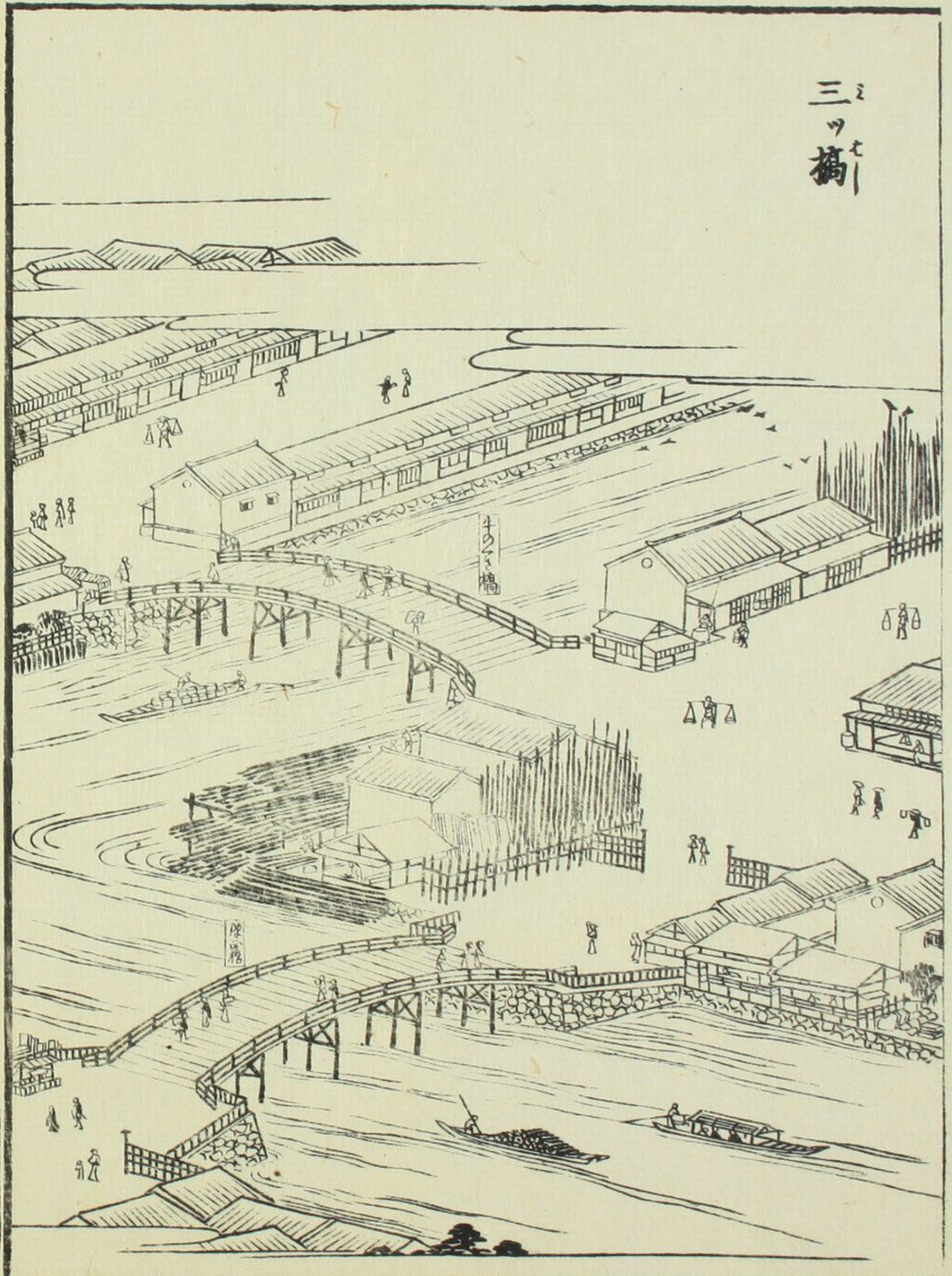
最少りす菊岡沾涼云く川村隨見ハ

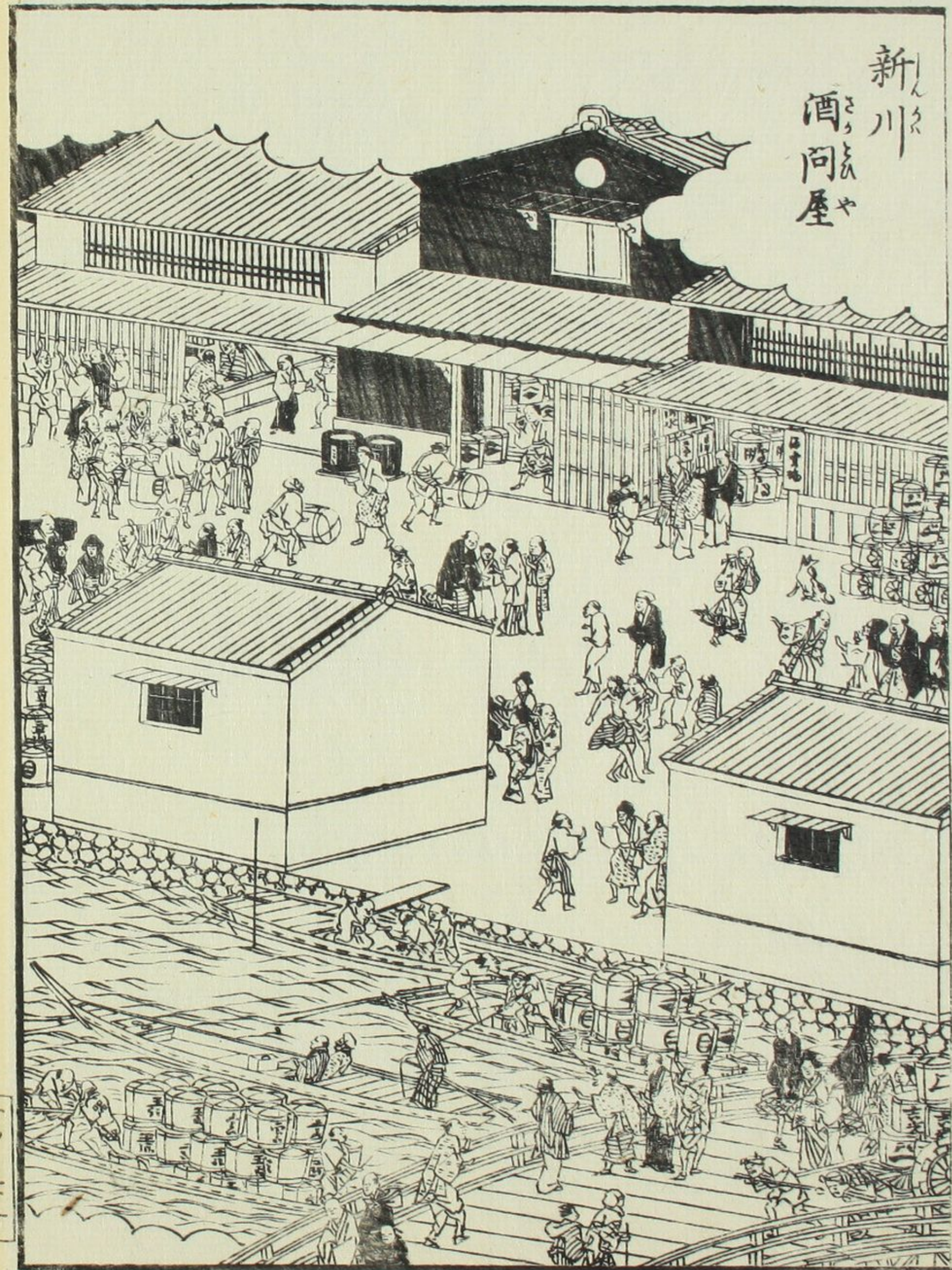
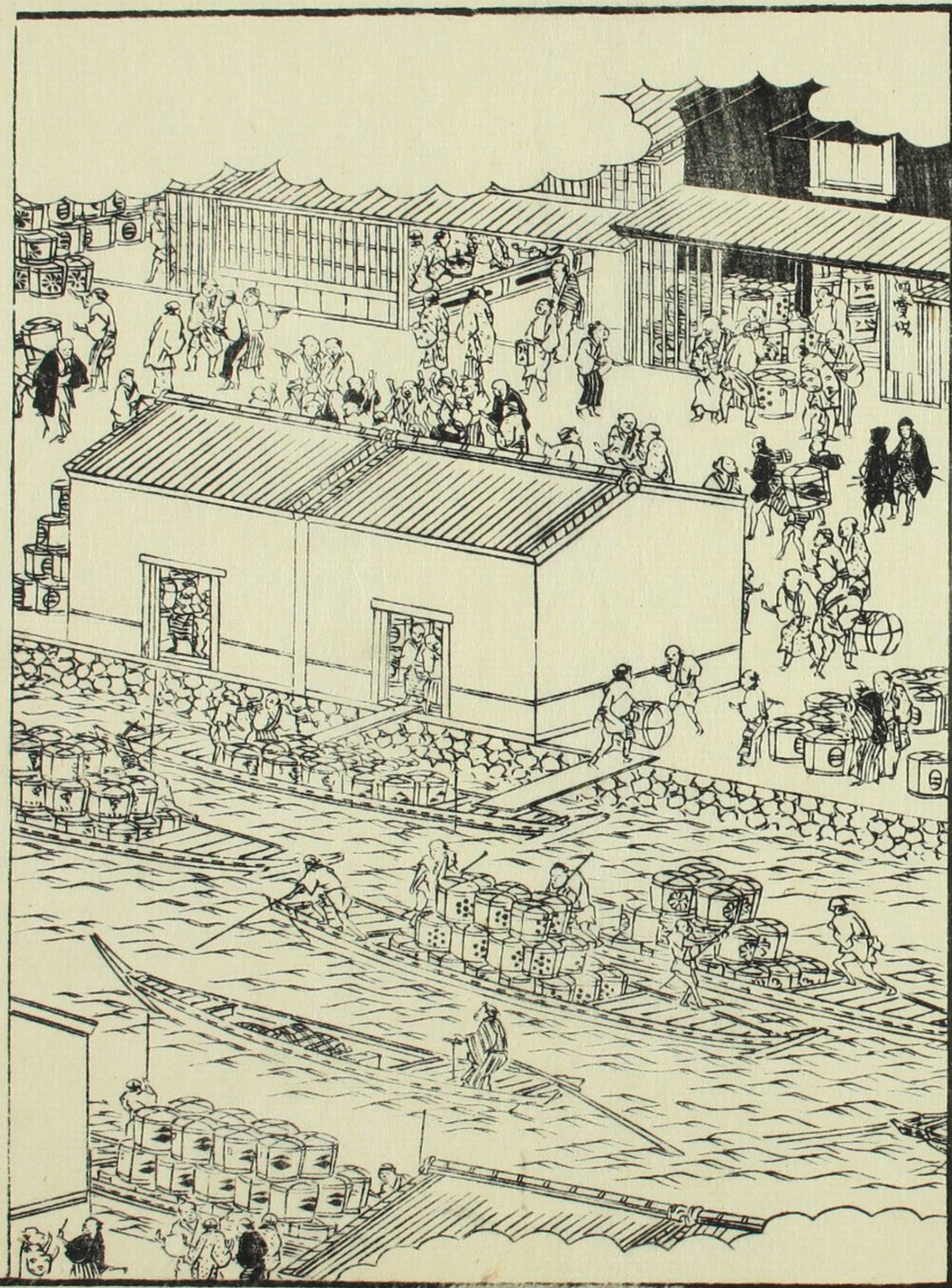
濃幕下川村氏の始祖あり

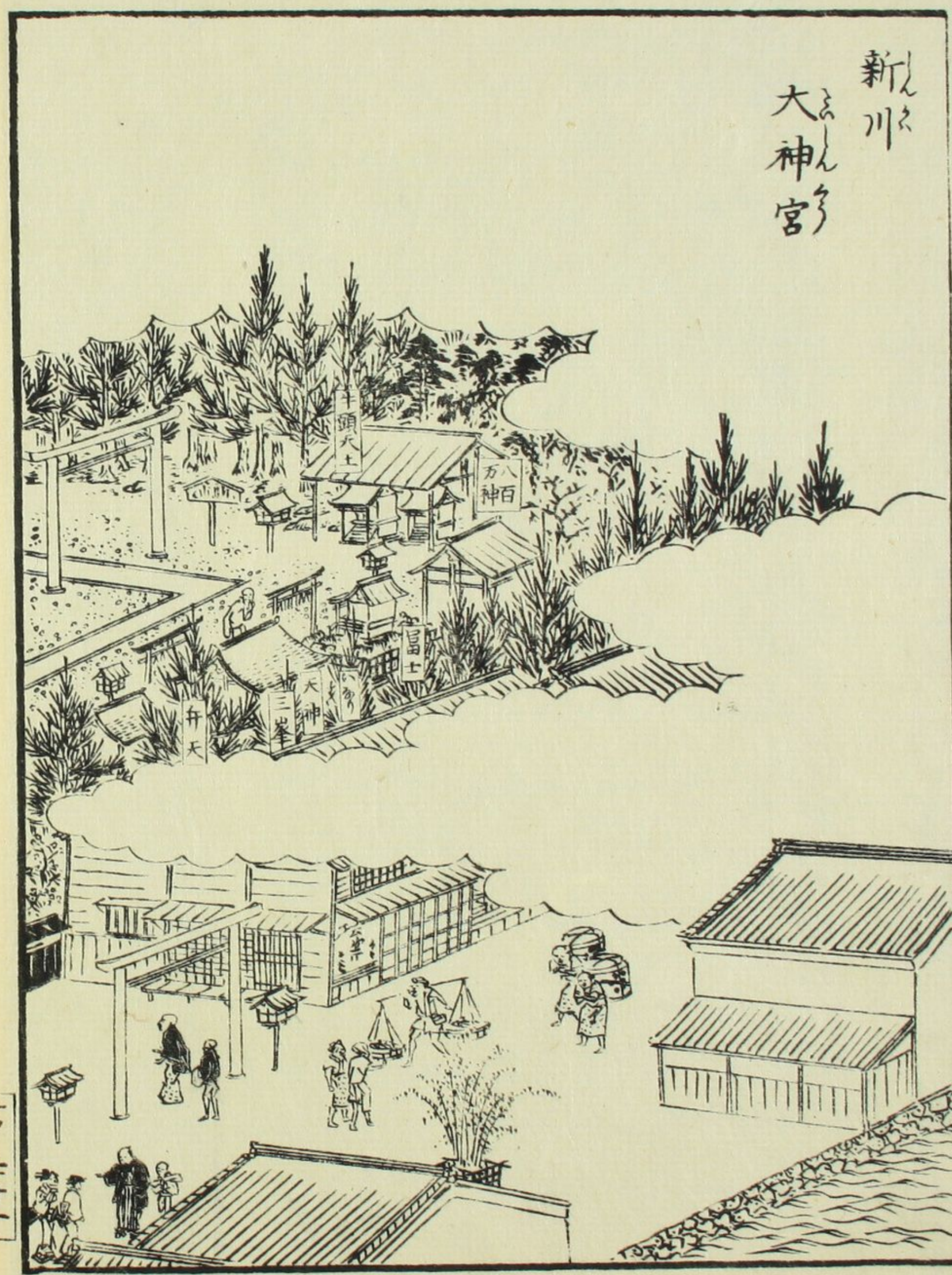
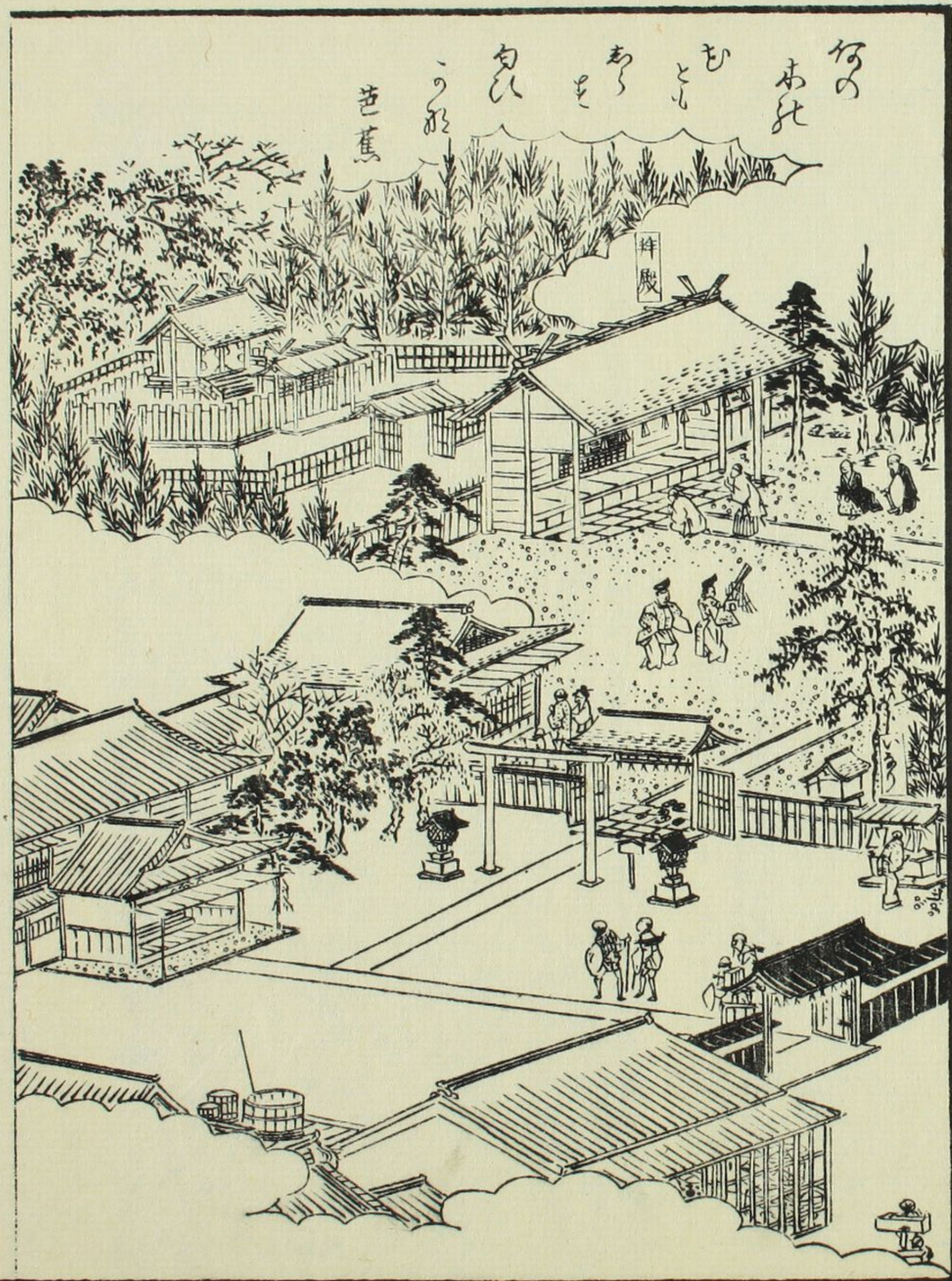
風羅袖日記
 ハテ塚多々
 菜の
 赤
 の
 石
 此
 間
 芭蕉



三ツ橋







伊勢太神宮 同所四日市町あり此地の産土神とて此所俗に新小

昌の地あり伊勢内外西皇太神宮を勧請し多り遷拜所とて此所俗に新小

宮伊勢と同年なり江戸鹿子ハ寛永伊勢内宮の社僧慶光院比

丘尼江戸参府の折柄旅亭の假の為ニ此地をのみとて慶光院伊勢

御門並比せしれ紫衣を賜りて御未印地なり始祖の比丘尼ハ内宮建立の時

より連綿とて社僧より依り内宮の社僧山本大夫ハ始祖慶光院の子孫あり

今も彼寺の住持比丘尼ハ代々この家より嗣傳するなり

此上人の旅宿なる一處也此西遷せしれあり

年山紀聞云 永祿元年日記記稱後六月三日中山亞相神官被於云去月廿三日神官

上棟母より令沙汰し中注進有る或比丘尼号上人先皇時代者一号

慶光院以諸國勸進ニ力ニ上棟取立者之内又内宮上棟存立ト云云雖

不相應する未世也此後神有子細を不測なり

永代橋 箱崎より深川佐賀町ニ掛る元祿十一年戊寅始て是を

架せしめらる永代島ニ架せし名とす長凡百十間餘あり此所

諸國への廻船輻湊の要津とて高橋上り高橋下り此橋のわら

深川の大渡りとして東南ハ蒼海やしく房総の翠壺斜ニ開き美

蓉の白峯ハ大城の西ニ峙荒波の遠嶺ハ墨水ニ臨むて朦朧とて

台嶺金龍の室閣ハ緑樹の蔭ニ見えかづれて自丹青を施せし

似て風光さびしく画中ニあるること

薬師堂 靈巖島銀町ニあり別當ハ真言宗中々カマクサ医王山圓覺寺

と号す本寺ハ三州鳳来寺峯の薬師と同本同作中々理趣仙人

大宝年間ニ造立ありしとあり座像序丈三尺あり鳳来寺薬師此靈

像ハもと高野山橋本の里ニありしと慶長年間當寺の附基

惠生阿闍梨此地ニ迂ニカマ後靈巖寺の境内ニ安深川靈

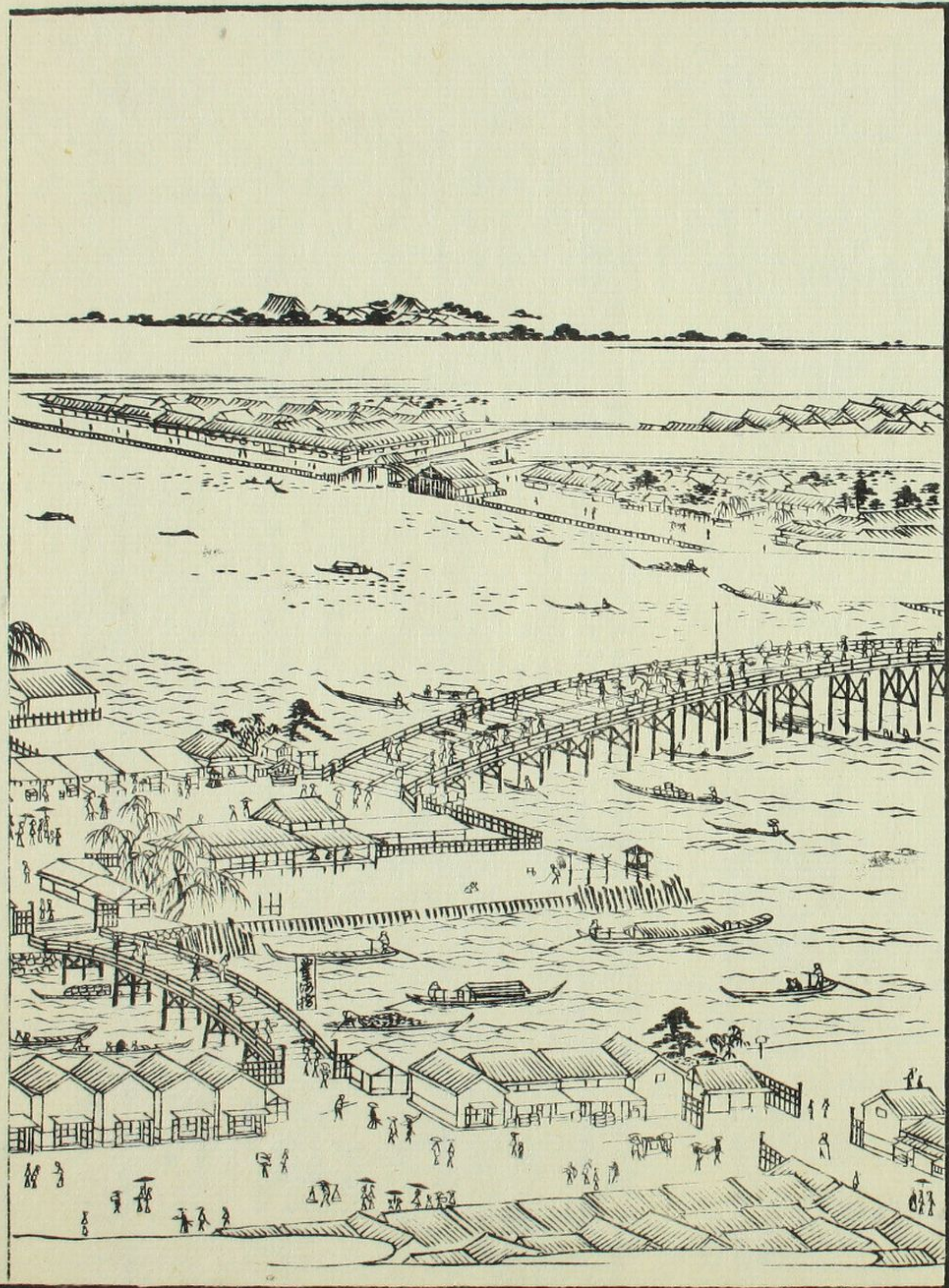
此地ニあり被寺始 萬治の後靈巖寺深川より遷此項此薬師堂

稻荷の社のも此地ニ残しとめらるること

橋本稻荷社 同境内ニあり此所の鎮守とて社記云神像ハ弘法

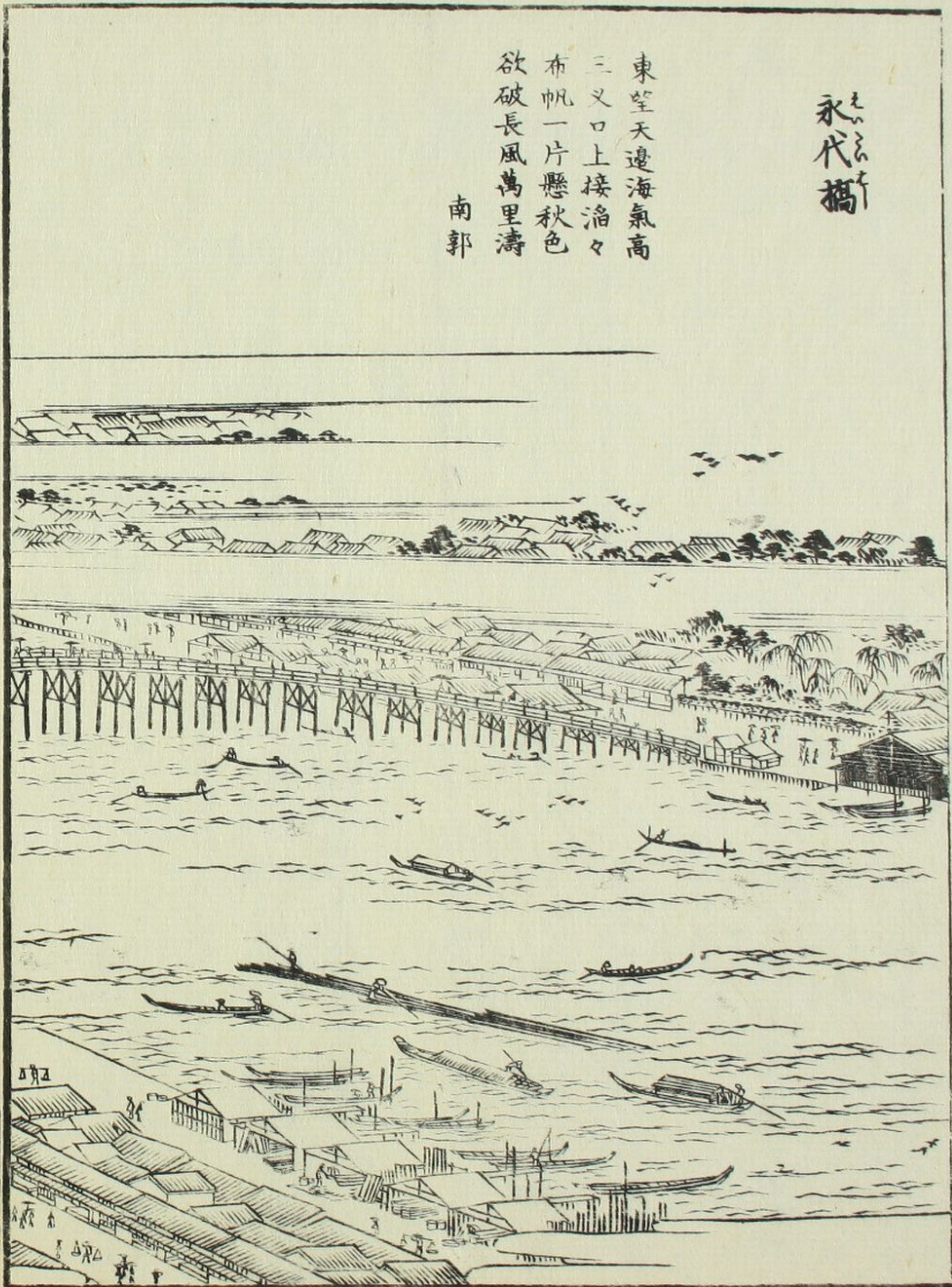
大師の作中々此丈一尺山城國伏見稻荷明神と同本同作中々

より往古高野山の麓橋本の里ニ宮居を造りて安置ありし



永代橋

東望天邊海氣高
 三叉口上接滔々
 布帆一片懸秋色
 欲破長風萬里濤
 南郭



故ありく後らふ勸請なり

惠比須前稻荷祠 同所東湊町の南高橋の北詰人家北間に

あり 別當八天宮宗中と 昔日向井炭のやきふあましう海賊橋あり

引移られし頃宮居を構の外は出されしを此所と云ひしは

宮前又ハ蛭子前と唱へしを 古老云く昔此地より鏡池洲築地へ

出洲のあり此辺の洲は芝海老と云ふもの多く集る所なり漁人字は此の洲

と唱へ其洲崎はあり 稻荷の宮あり海老洲の宮とのまよひありしを

湊稲荷社 高橋の南詰はあり 鎮座の由来詳かしく此地ハ廻船

入津の湊やと諸國の商船普くく運送す此故あり近世吉田家

前ふく積所の品を悉く向屋へ運送す此故あり

より湊神社の号を贈らる當社ハ南北八丁堀の産土神なり又

此川口の北は監船所あり船の出入を改らる 事鑑合考云此祠昔ハ

ありし此地年月と重なり家居立しと 八丁堀一丁目の南岸は

二ノ七十四

鏡池洲 南北ハ凡八町ありもあましう傳云寛永の頃井上稻富小

大筒の町見を試し不なりと或此出洲の形状其器は似し故の

号ありともしと 白石先生の説は此地ハ明曆火災後小桑山は傳某を

記せり 今ハ薪炭石杯の向屋多く住せり 又故家珍蔵の書圖ハ新

抄の月ハ世界の鏡池洲のありしを傳人ぬく 半井

半井ト養翁居宅地 同所明石町の裏通あり 或人云延宝九年

西の裏通り寒さ橋の東詰の北の方川は傍ら角は記しあり 半井ト養翁ハ

東都の警官なり牡丹花肖拍の商孫なり 連哥ありし

狂歌を能せし此地を賜りし頃の口を云ふ

ト表ハ本道と云ひしを思ひしを云ふなり 外科あり

了然禪尼菴室地 此地ハ住ししを紫の一本と云ふ草紙に

了然禪尼菴室地 此地ハ住ししを紫の一本と云ふ草紙に

了然禪尼菴室地 此地ハ住ししを紫の一本と云ふ草紙に

了然禪尼菴室地 此地ハ住ししを紫の一本と云ふ草紙に

了然禪尼菴室地 此地ハ住ししを紫の一本と云ふ草紙に

了然禪尼菴室地 此地ハ住ししを紫の一本と云ふ草紙に

佃島 鋳炮洲（船松町より海渡）は傍々（文龜年間江戸）孤島を以て

の舊國は向島とあり天正年間

東照大神君遠州濱松の所城をまりく皇都へ上りぬ頃攝津

國多田の所廟也ひ住吉大神をまつてまつりし神崎川涉船

なりし一佃村の漁父獵船をこきゆりて渡りし一伏見

所城をまりし時を時も涉膳の魚をまつてまつりし旨

西國へ使たりし折々ハかゝる漁船を以て仕へまつて

旨命ありしハ大坂兩度の所陣也軍使の密使或ハ涉膳の

魚獵等ありし日と怠なく仕へまつりしハ後漁人三十四人江戸へ

りされ慶長年間浅草川涉遊獵の時網を引せり同十八年

八月十日海川漁獵を旨旨免許なりしあり

難波河は今も交川岸と云所ありと云人網と号けり用事あり

然寛永年間

徳炮洲の東の干潟百間四方の地をり正保元年二月漁家を立並て

本國佃村の名を採て即佃島と号く又白魚を取らむ

旨台命より毎年十一月より三月迄怠りし其

間ハ他の獵を堅く禁めし猶後深川八幡宮の前

空地三千坪をありし佃町と号けり

或人の説は此所ハ始安藤右京進也きの地中一住吉の社

貢佃島ハ紀州賀茂の漁人難居一此地ハ殊更白魚は名あり故

冬月の間毎夜漁舟は篝火を焼四手網を以て是を漁り都

下地ありし是を賞せり春に至り二月の末よりハ川上は登

弥生の頃子を産を其子秋に至り七八月の頃江海入と云

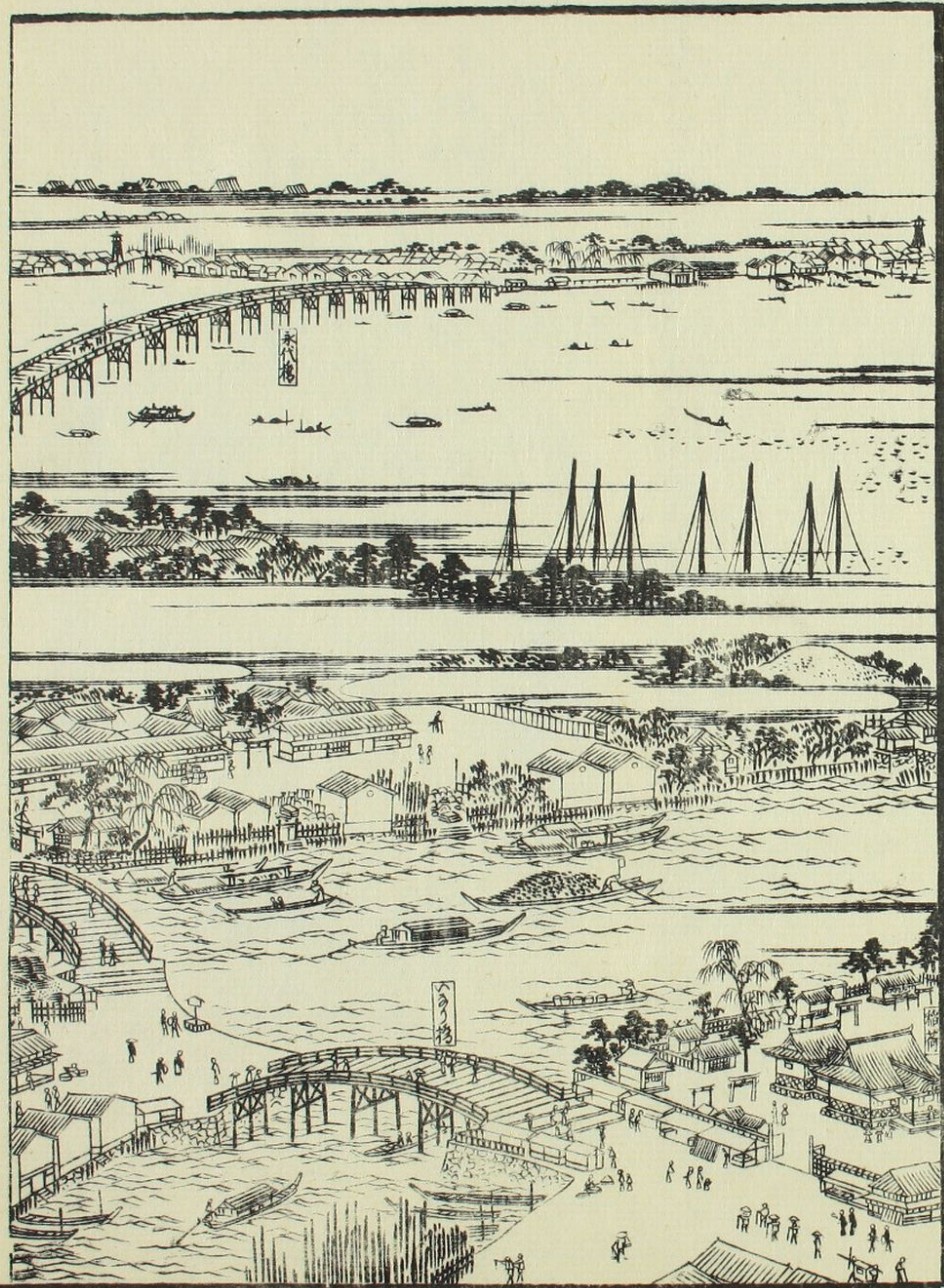
事合考云西國の川筋は産を

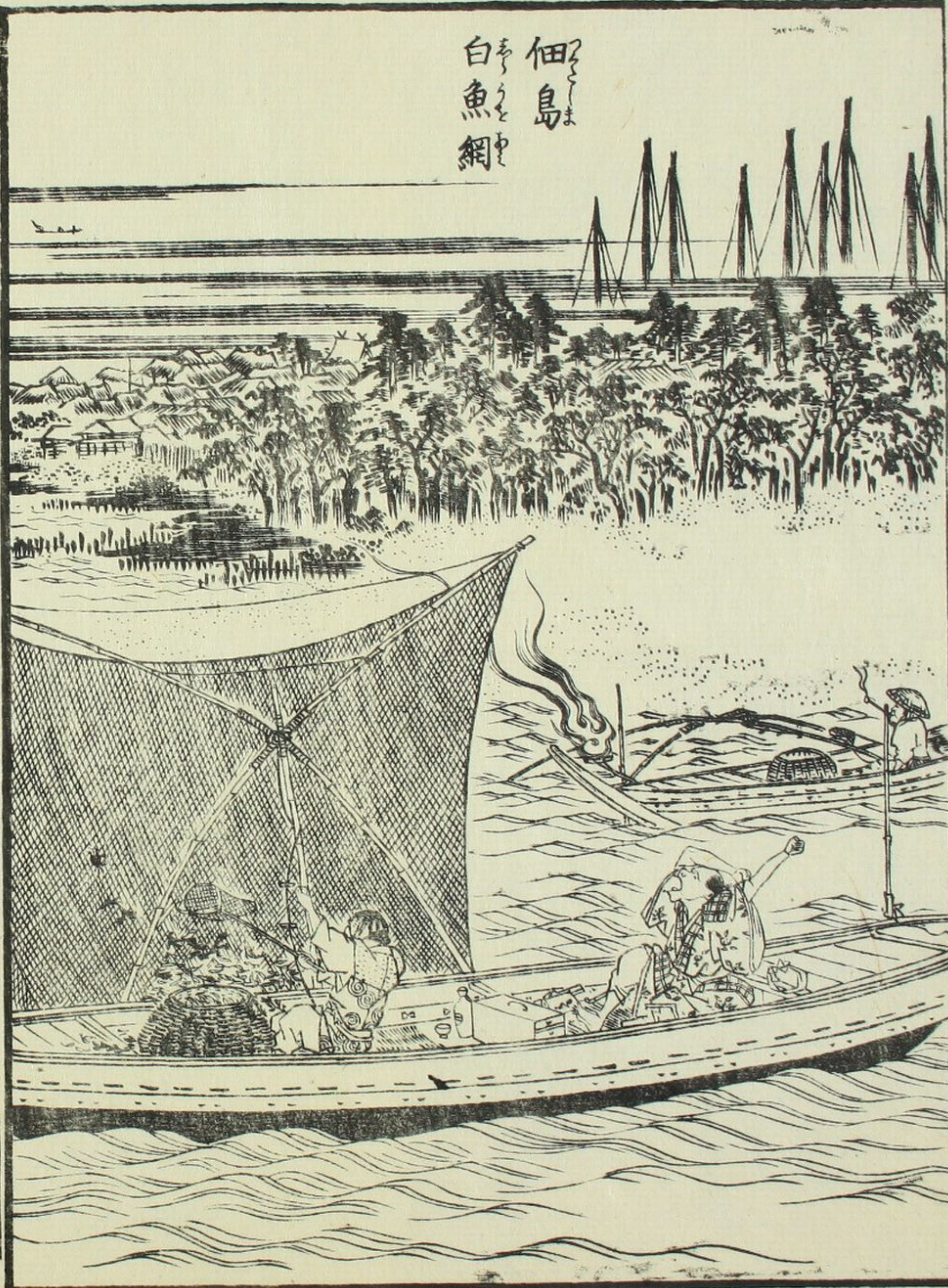
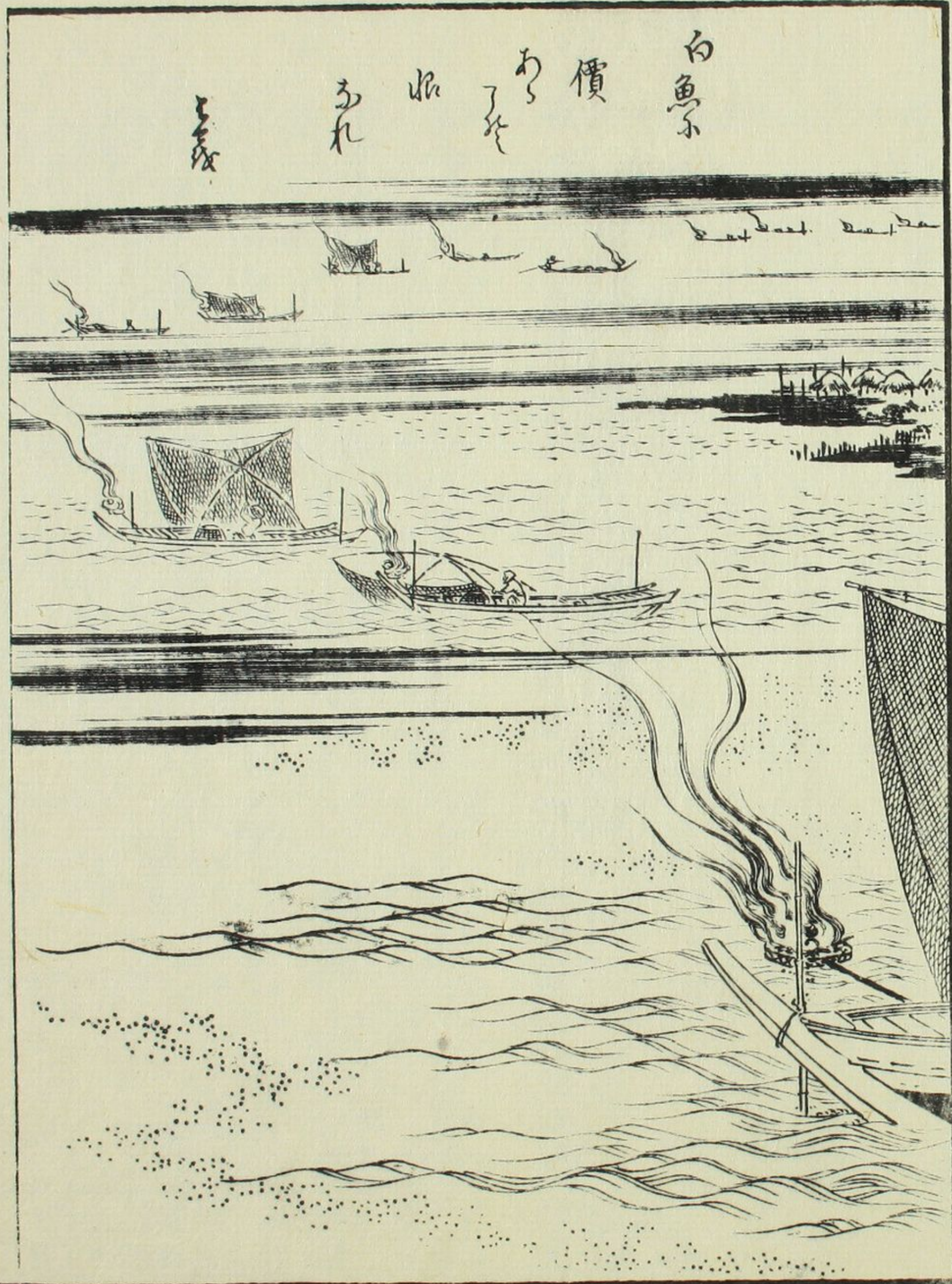
白魚ハ尾州名古屋の浦よりとりしと云

住吉明神社 佃島はあり祭る神攝州の住吉の所神は同一神主

平岡氏奉祀を正保年間攝州佃の漁民は初此地を賜り

一よりこゝに移り住本國の産土神なる家分社と云





住吉の宮居を建立せしむるなり
撰州の佃村八西成郡あり古今集また
住吉明神の宮居あり神功皇后三薛在代赤尾陣の時此地は舟の艦綱を
うけあひひりこ降佃村の地は舟の艦綱をばへり例祭は毎歳六月廿八日廿九日
此分社 毎歳六月晦日名越被修行あり 西日なり人々群集す
道遙院実隆公位占守納和奇十首の題を詠てまうり中よ
江上月

此浦の入りは松浦の入りとみふれとありとて 兼秋之む 戸田茂暁

夕月やそ住吉にほくたし海 廿角

此地ハ都下を去る咫尺なることと離島やそ漁人の住家の
所得頼なり弥生の潮乾ゆる貴賤袖を交へて浦風は酔を醒し
貝拾ひあそび磯菜摘みんと其與殊多し月平沙を照しそ
漁火白く芦辺の水雞波間の子鳥も共よ此地の景色よ入りそ四
時の風光足もとまらぬなり

鏡島 佃島の北ふ並へ今石川島と号す
俗は八幡島ともいふ昔
大猷公の時時石川氏の先代此島を
永田町へ屋敷替ありしより炭置場人足寄場おかれ 舊名を森島と云り江戸の

古岡よんえんそり 又其岡よ記て云く此島一名と鏡島と号く

古へ八幡太郎義家朝臣鏡と収りて神體と八幡宮を勧請

す石川大隅守居住の時ハ其庭中よありし今ハ鏡炮洲稻荷

境内よありと云 或人云昔 猷廟の時時異國より鏡一領をもちりし

是を片よ持ち 大樹の御前へ披露なりし時石川氏の祖大カありしハ

宅地よたまをとなり鏡と携へ賞とすなり此地るれハとて鏡島と号け

江風山月樓 築地稲葉侯別荘の号なり寛文二年壬寅の春此所

の海浜を填と土を積石を疊むて翌る年の秋其功なりと

いふ風光他よ勝れ殊よ洞庭の秋影よと越るなり

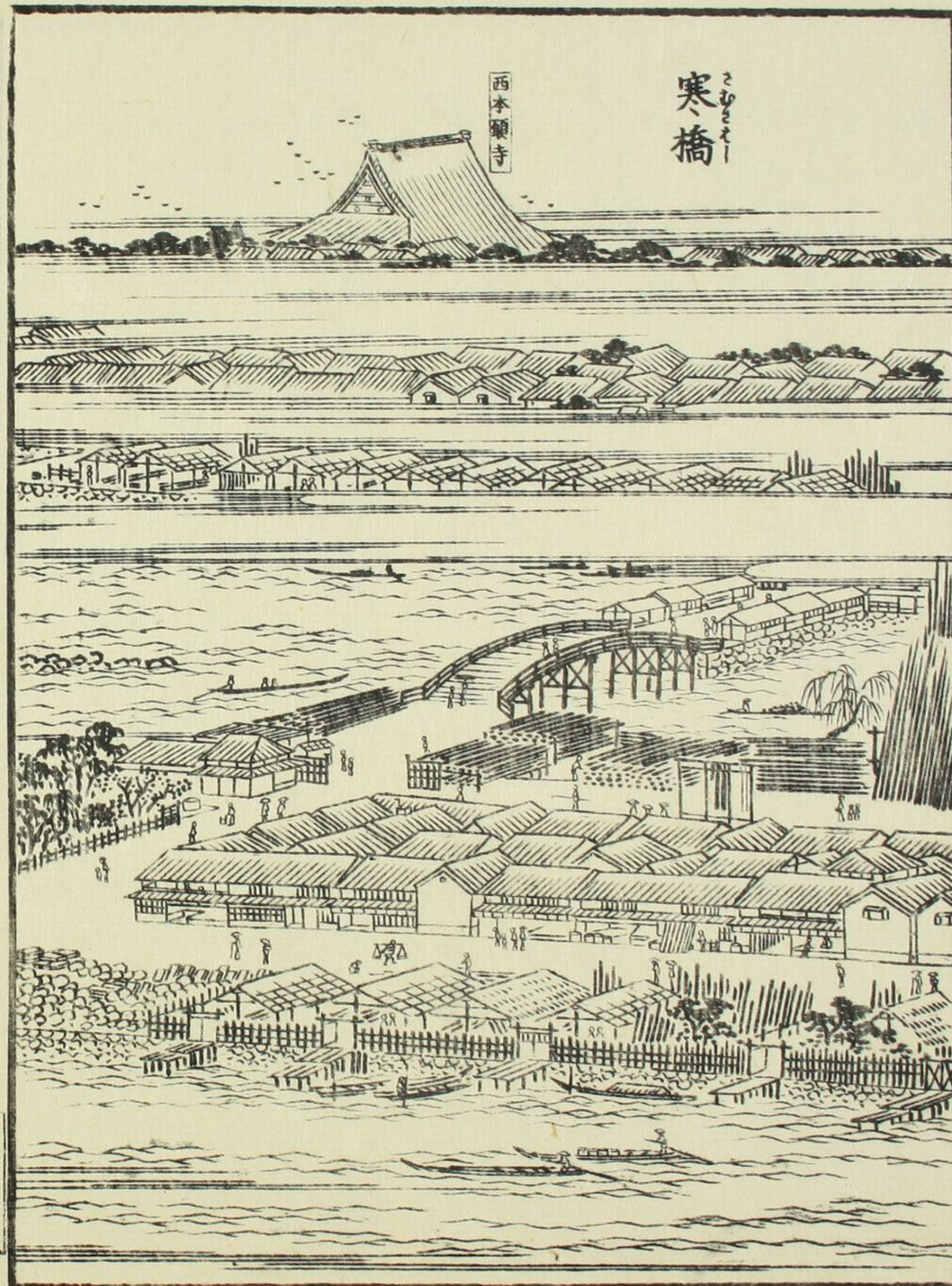
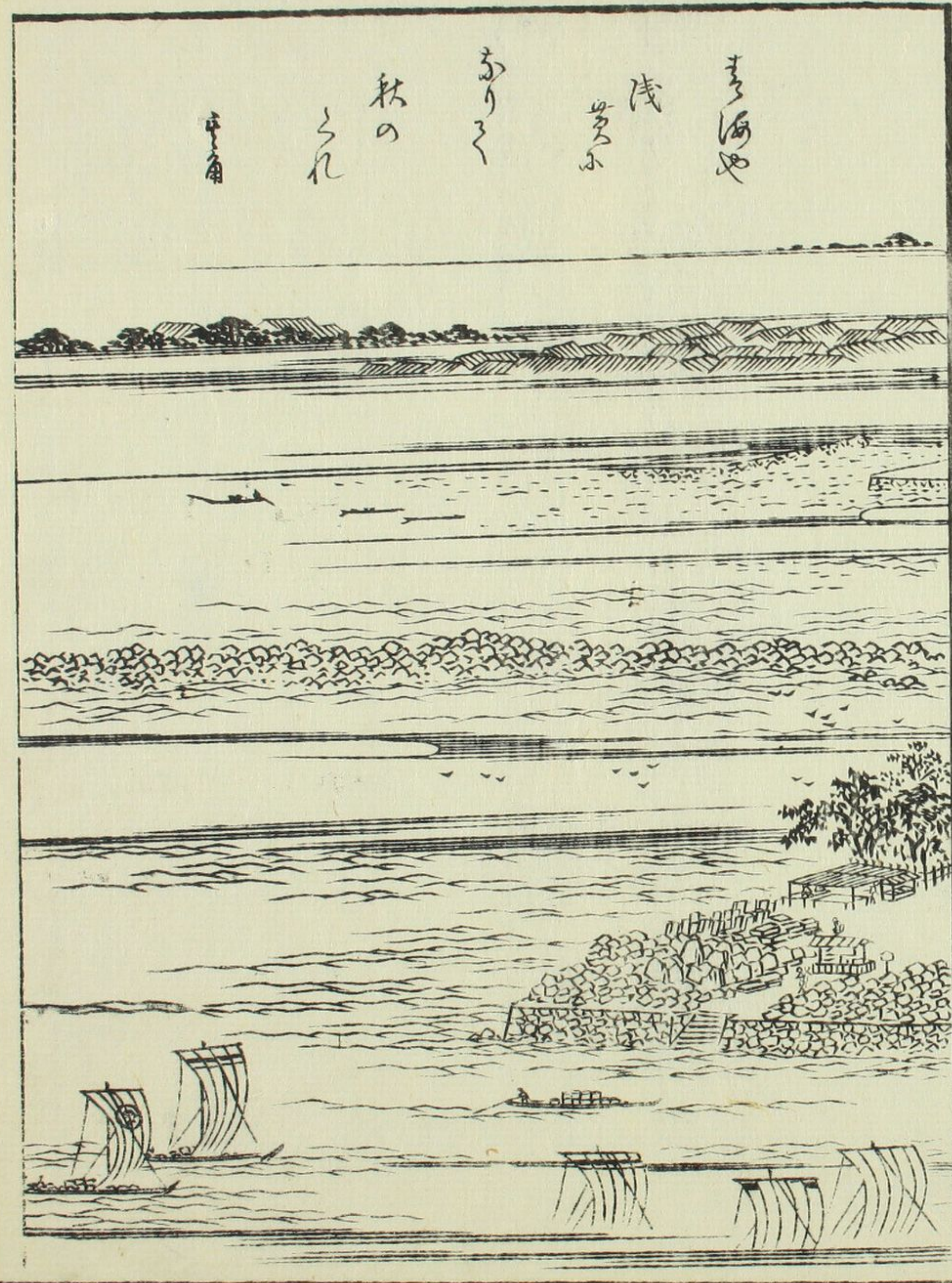
咳逆蒼姫 同藩中よありしつとも二尺そりの石像なり稲葉侯の始

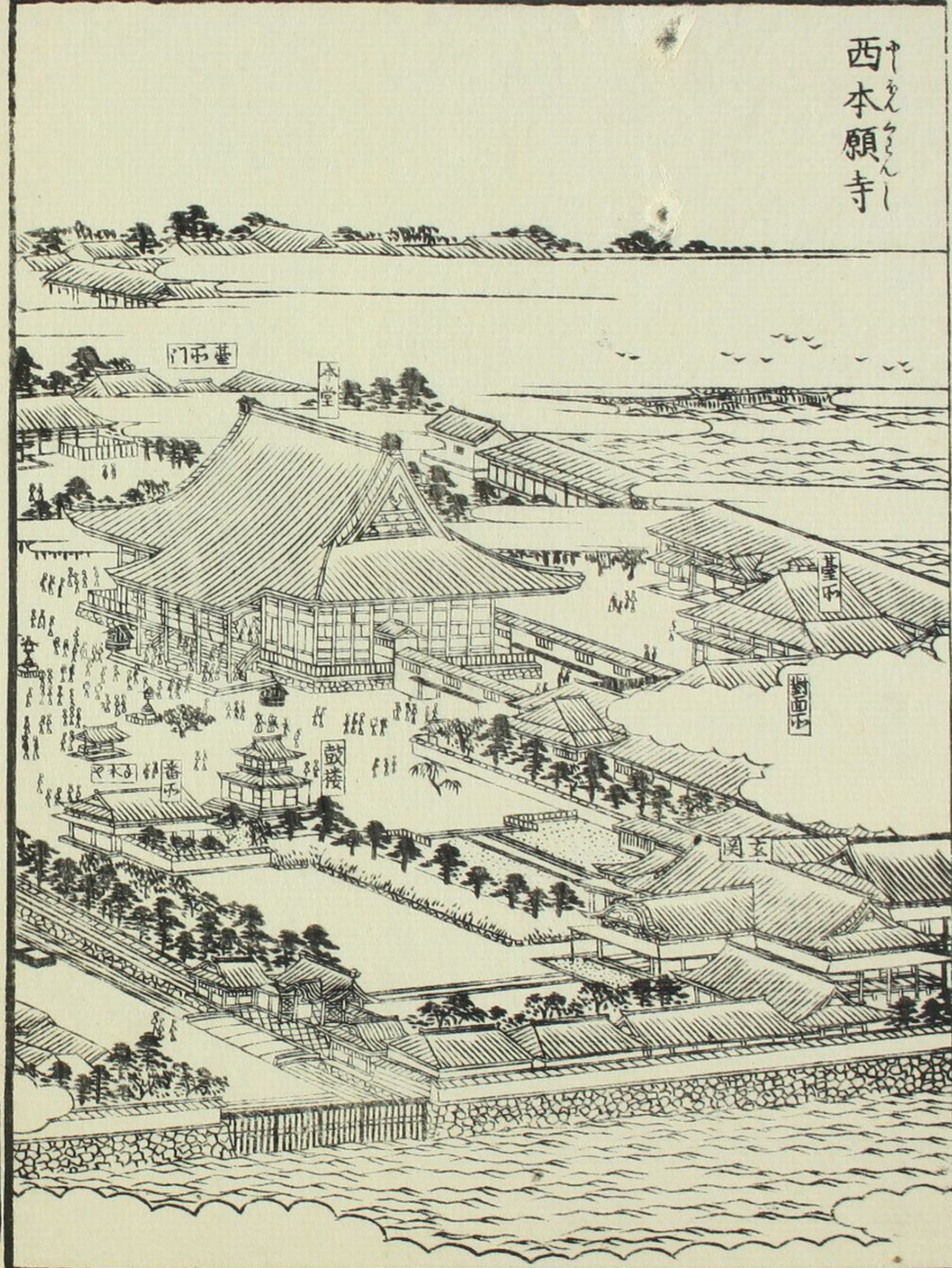
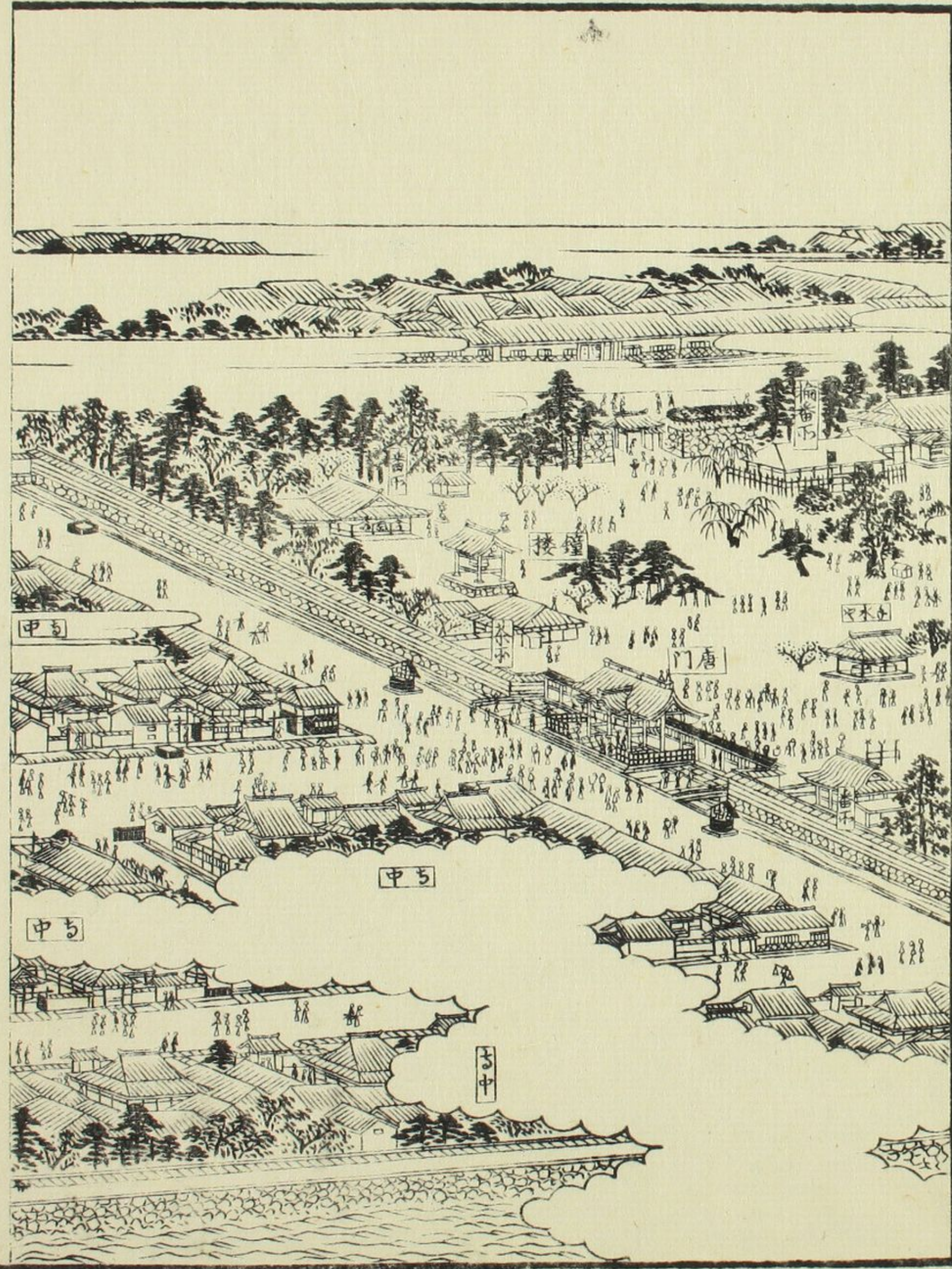
一の草庵よ一人の老僧の住ありし時そ逆と見せられしとて深山よ遊ふ

受ふ所の権いふ家臣田崎某の許に置去終行方とありしとて住する

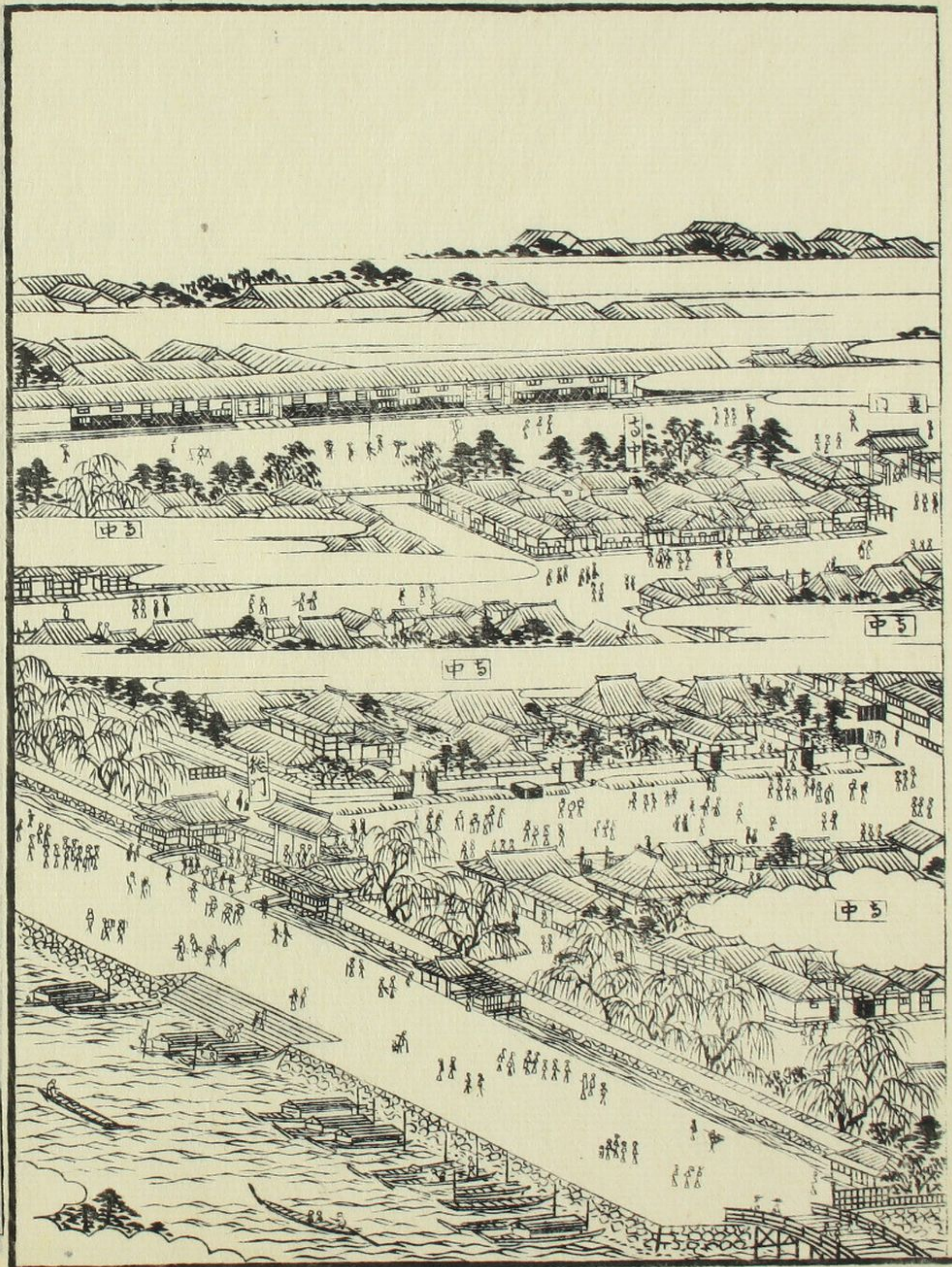
何人あそびを依著の石像と稲葉侯累代の牌堂よ逆一姫の石像ハ稻荷社前

置となり又蒼の石像ハ口中よ痴ありの寄願一姫の石像ハ咳とて此の亦





西本願寺



西本願寺 同所川を隔て北の方より俗に築地の門出と云ふ

或人云此世ハ明暦四年お仰のす 一向汎々々々京都西六條より此輪番

所なり 宗派のしよを 塔頭五十七宇あり 始横山町二丁目の南側

裏通りふつとを 明暦大火の後此地に移る 准如上人を當寺の

開祖と云 江戸名所記 神祖所在世の時より京都西本願寺の末寺と云

本願寺の建立と云 宗流と汲華と云 白石先生云く善養寺より一向僧東

和漢年契は延宝八年庚申西本願寺立ちあり 本意阿彌陀如来を聖徳

太子の彫像や々々泉州塚の信證院より 毎年七月七日

立花會十一月廿八日開山忌や々々七昼夜の法會修行あり是哉

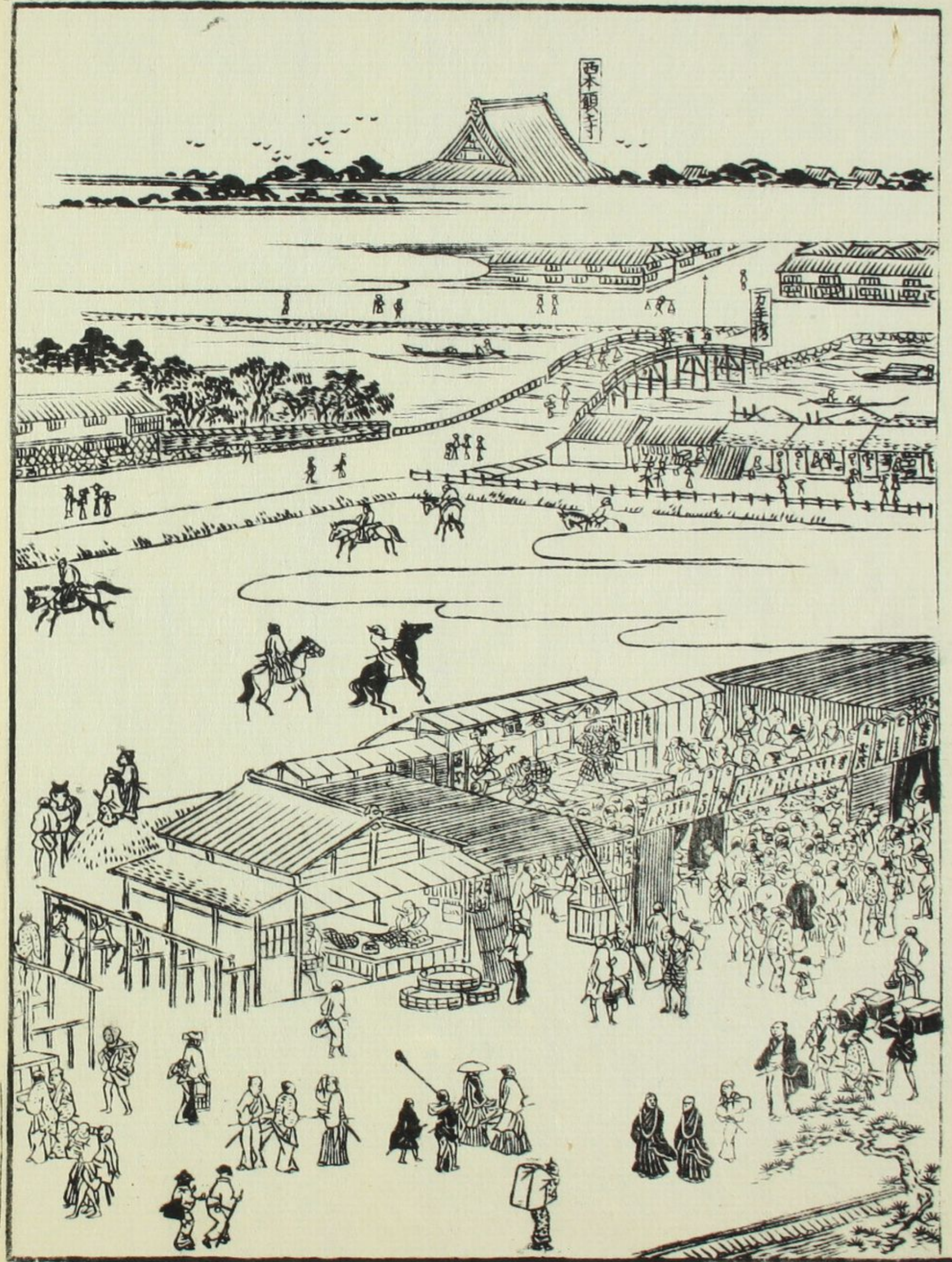
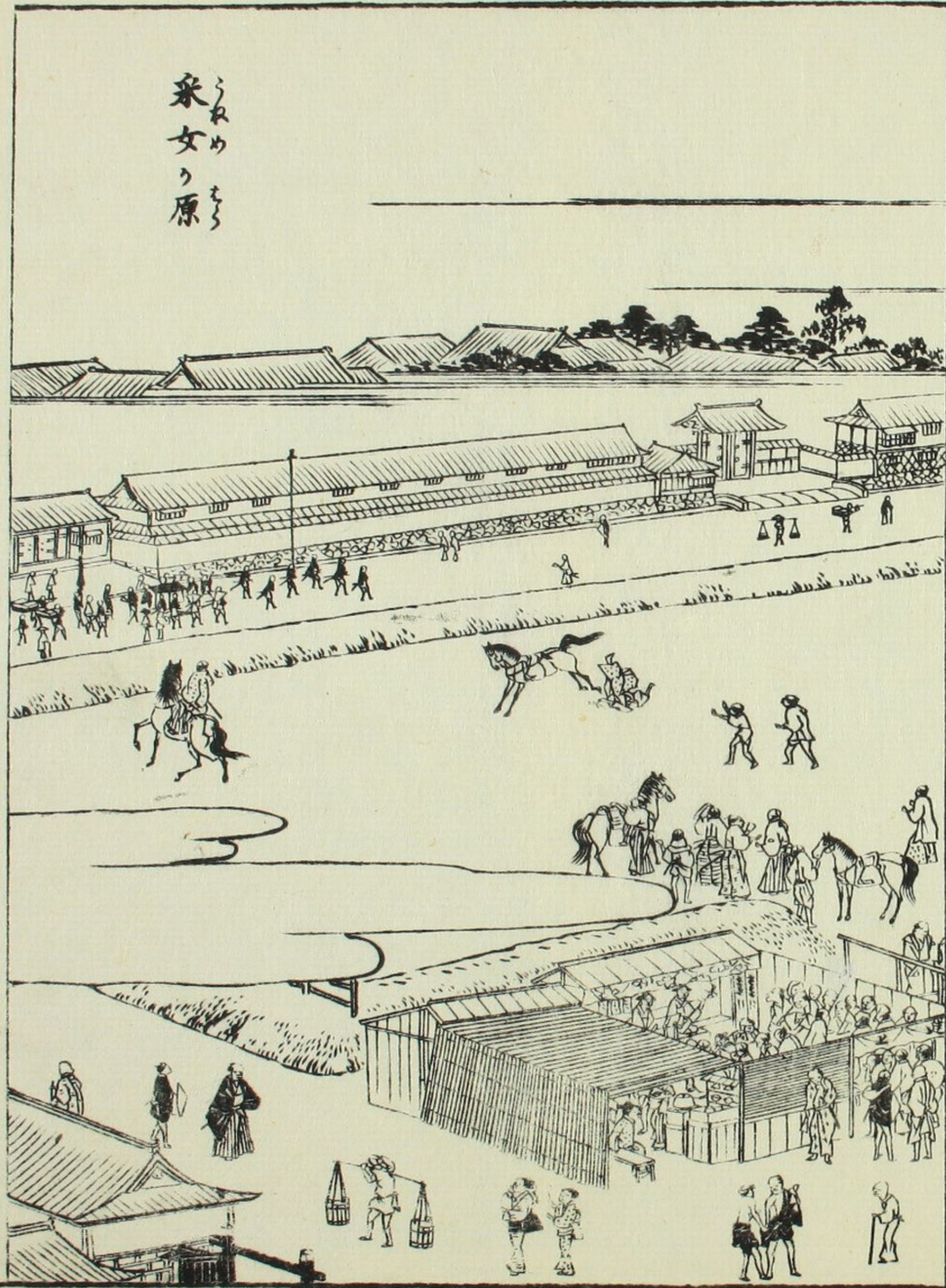
報恩講と云又俗に沙溝と称す 塔中成勝院は能仙杉風

米女原 木挽町四丁目より東の方此所は馬場あり常々賑々

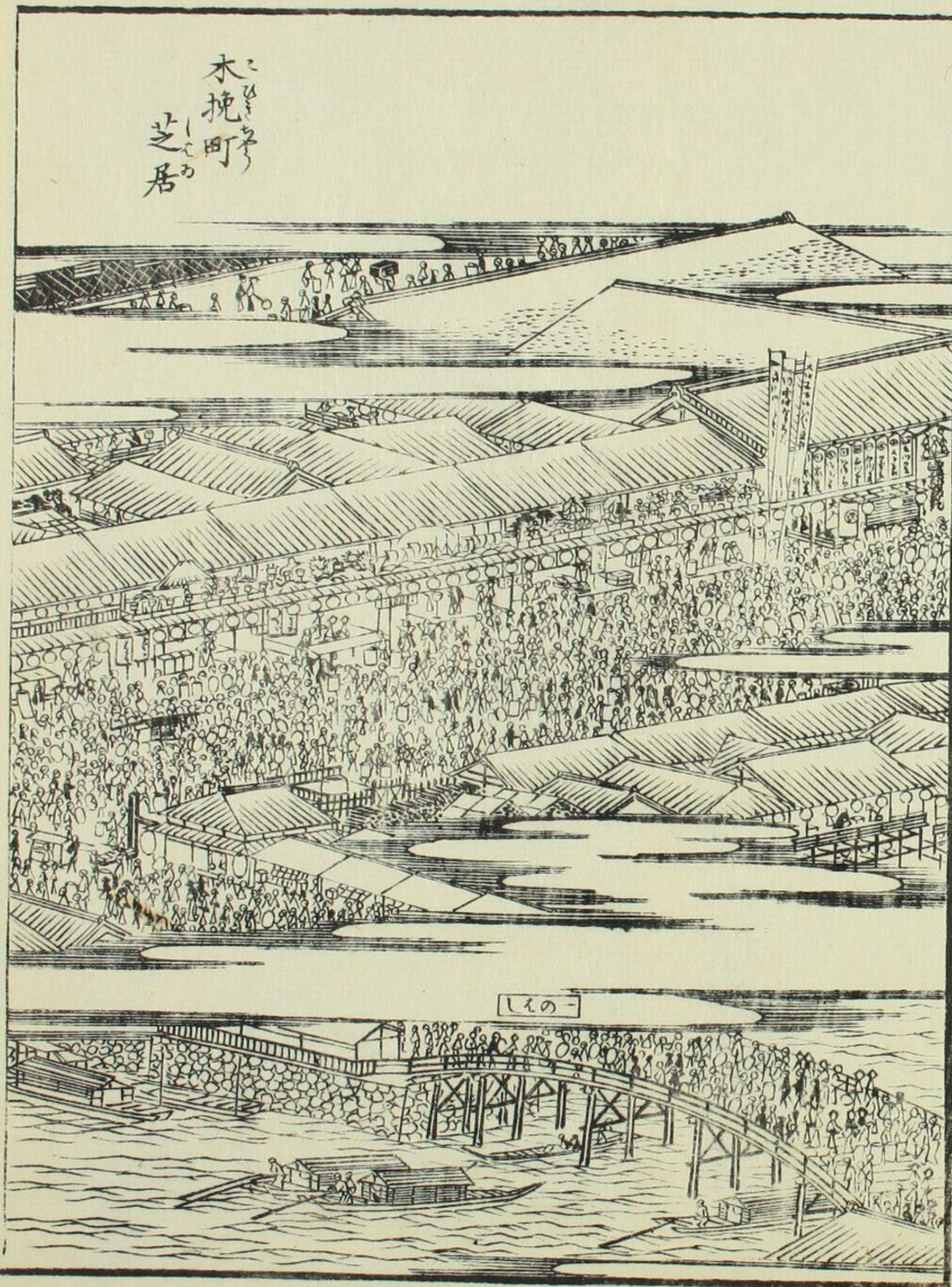
講釋師浄瑠璃の藝ハ軒と並々行人の足をささむ享保九年

迄此地は松平米女正定基のやきあり ねとあり同年正月毎日

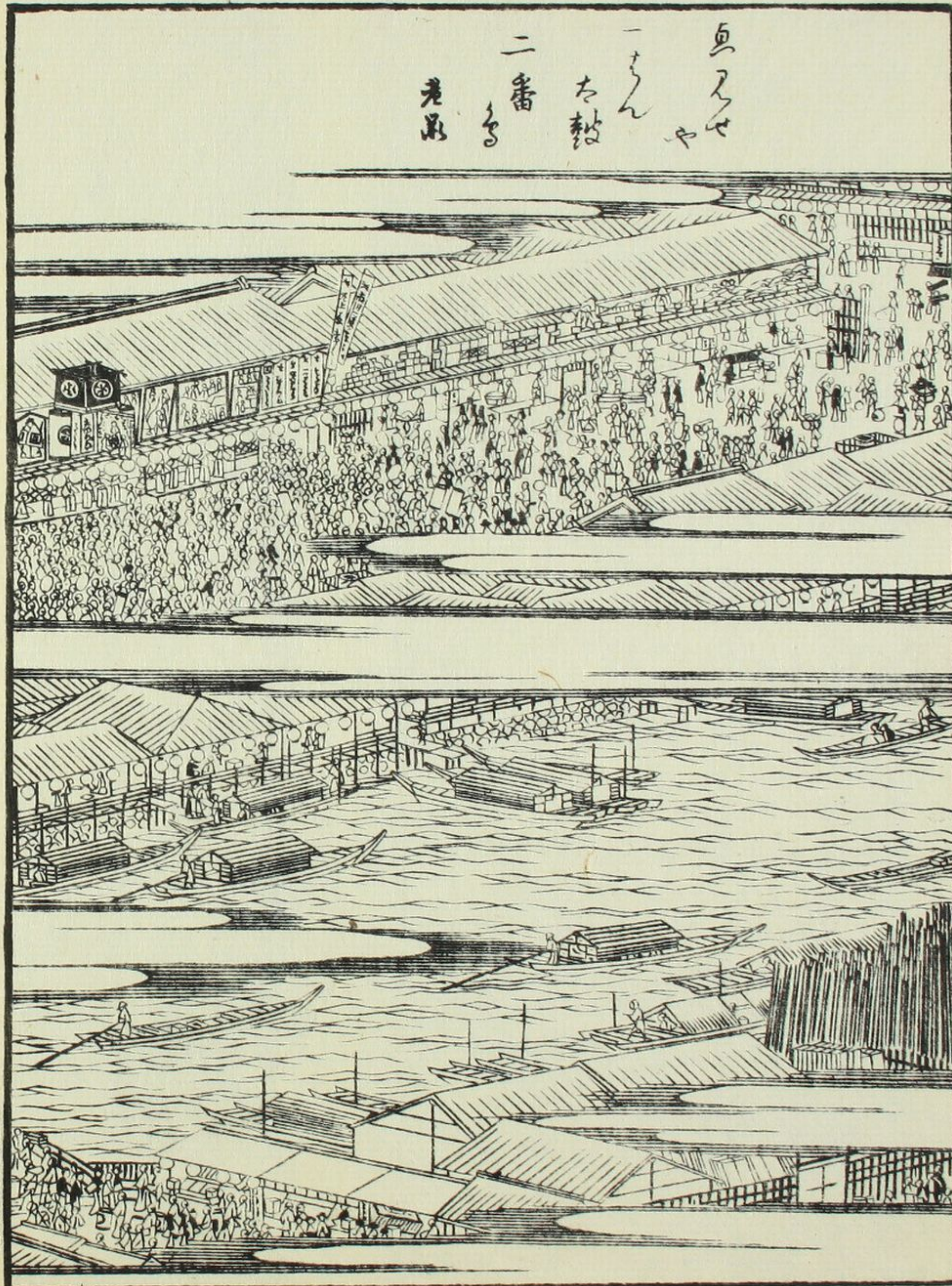
采女原

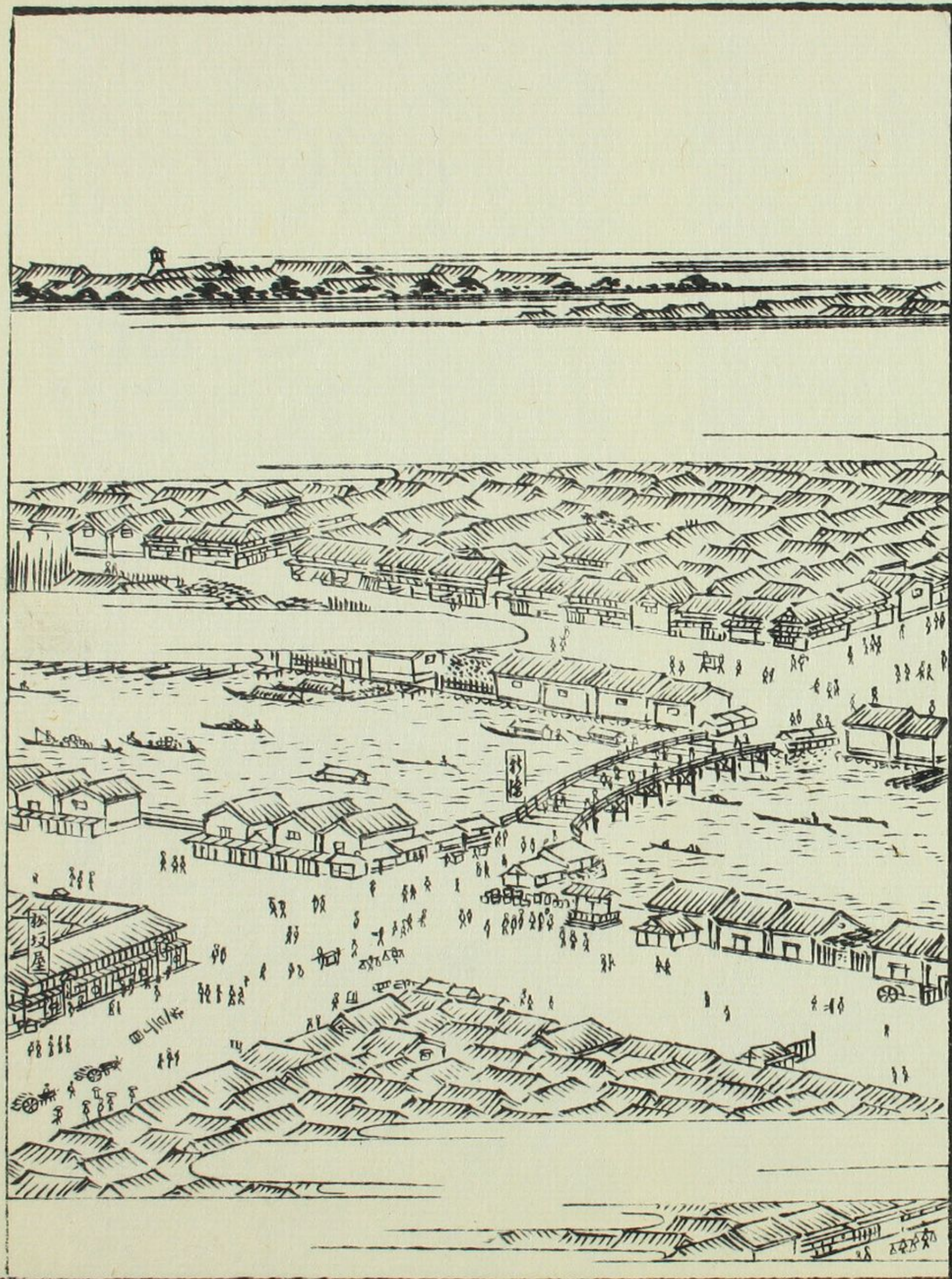


水挽町
芝居

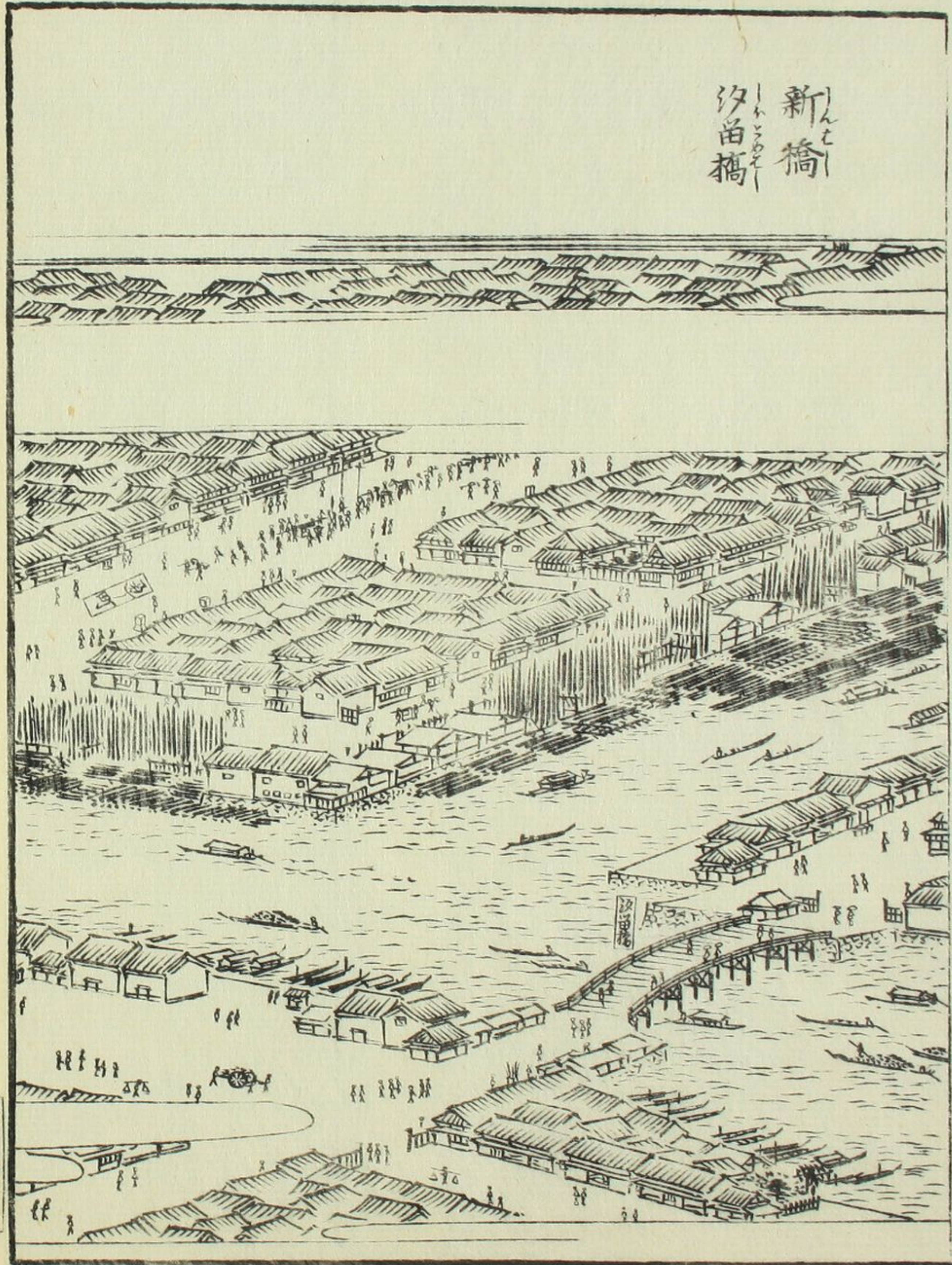


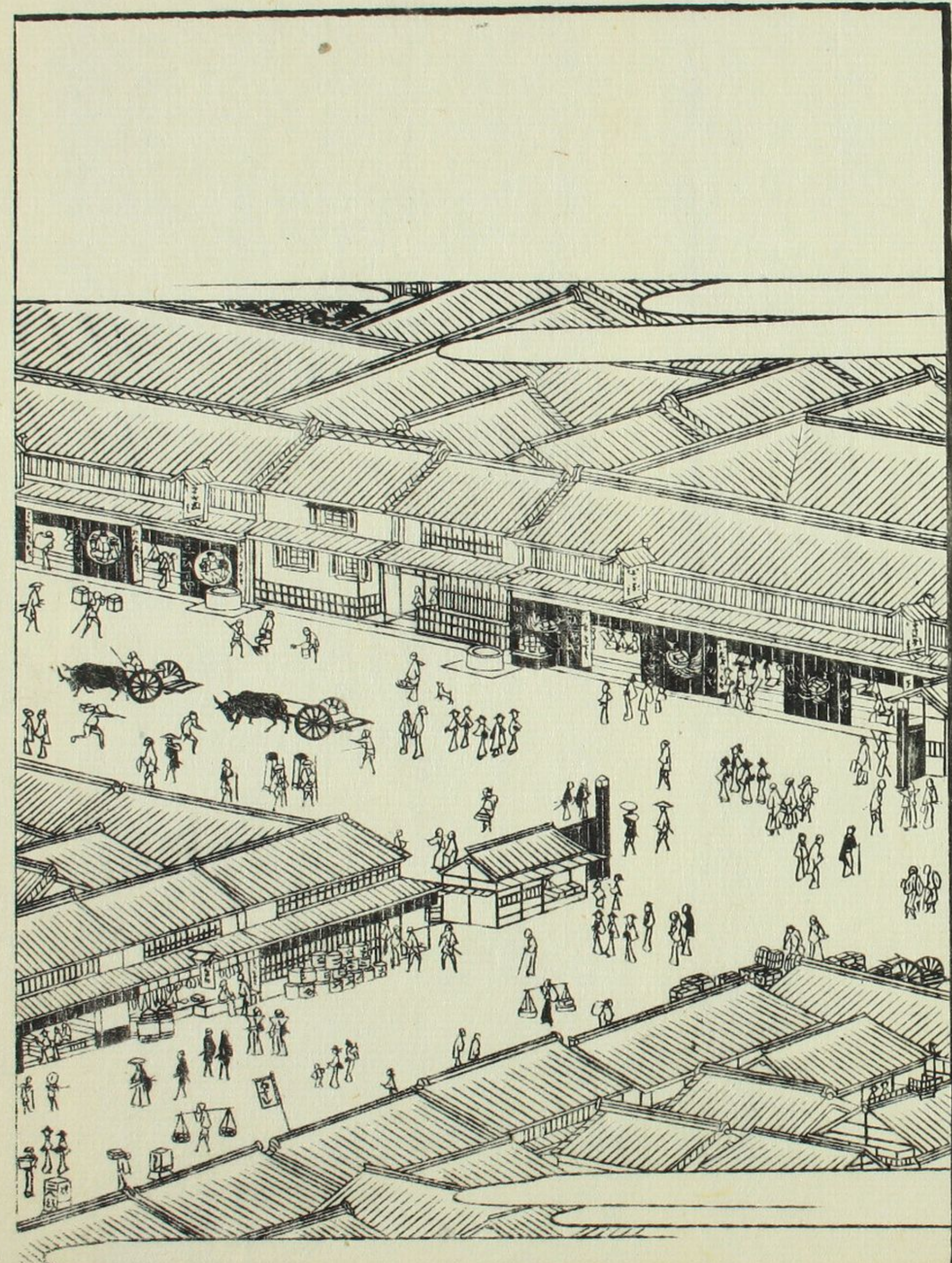
魚
一
右
二
番
老
取



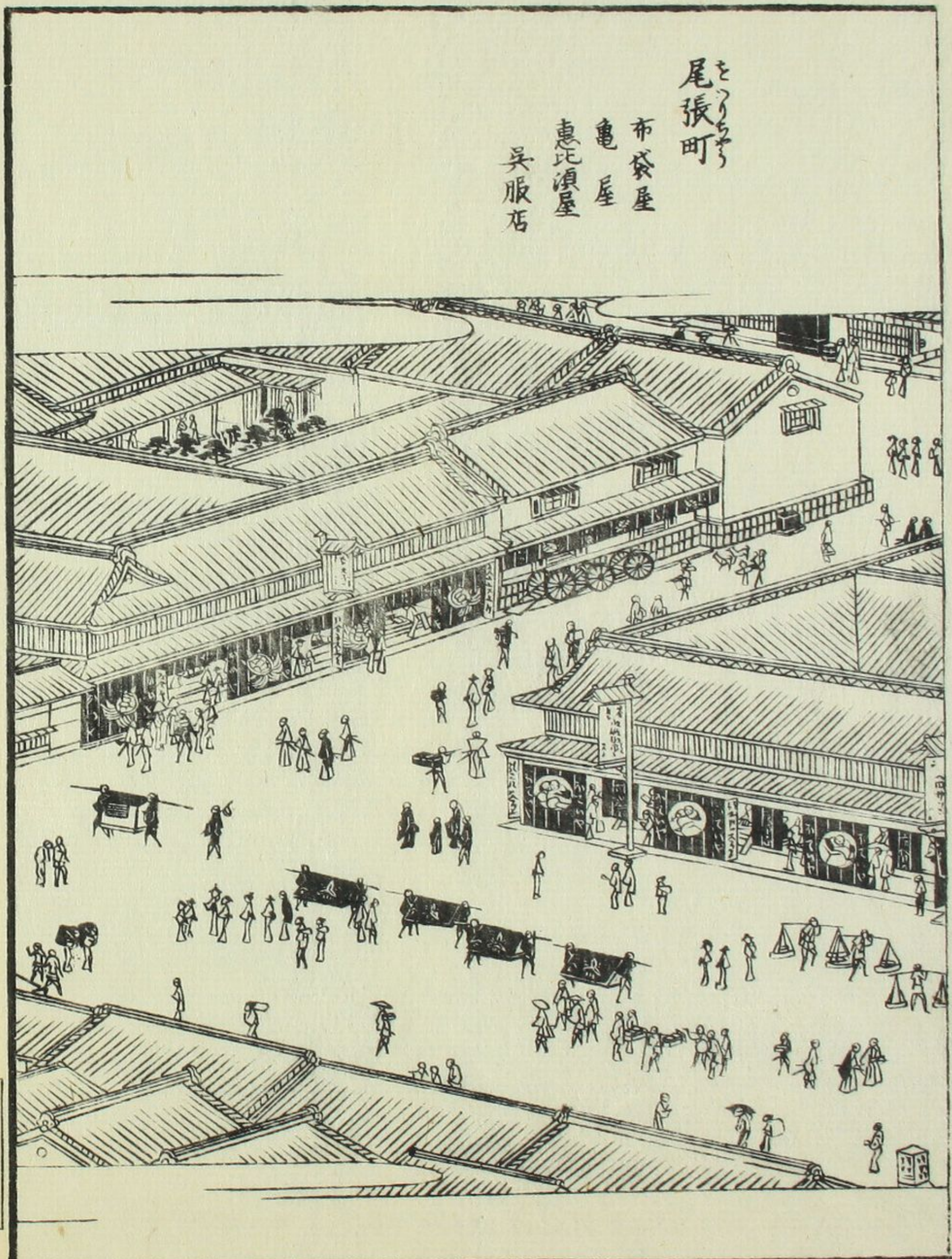


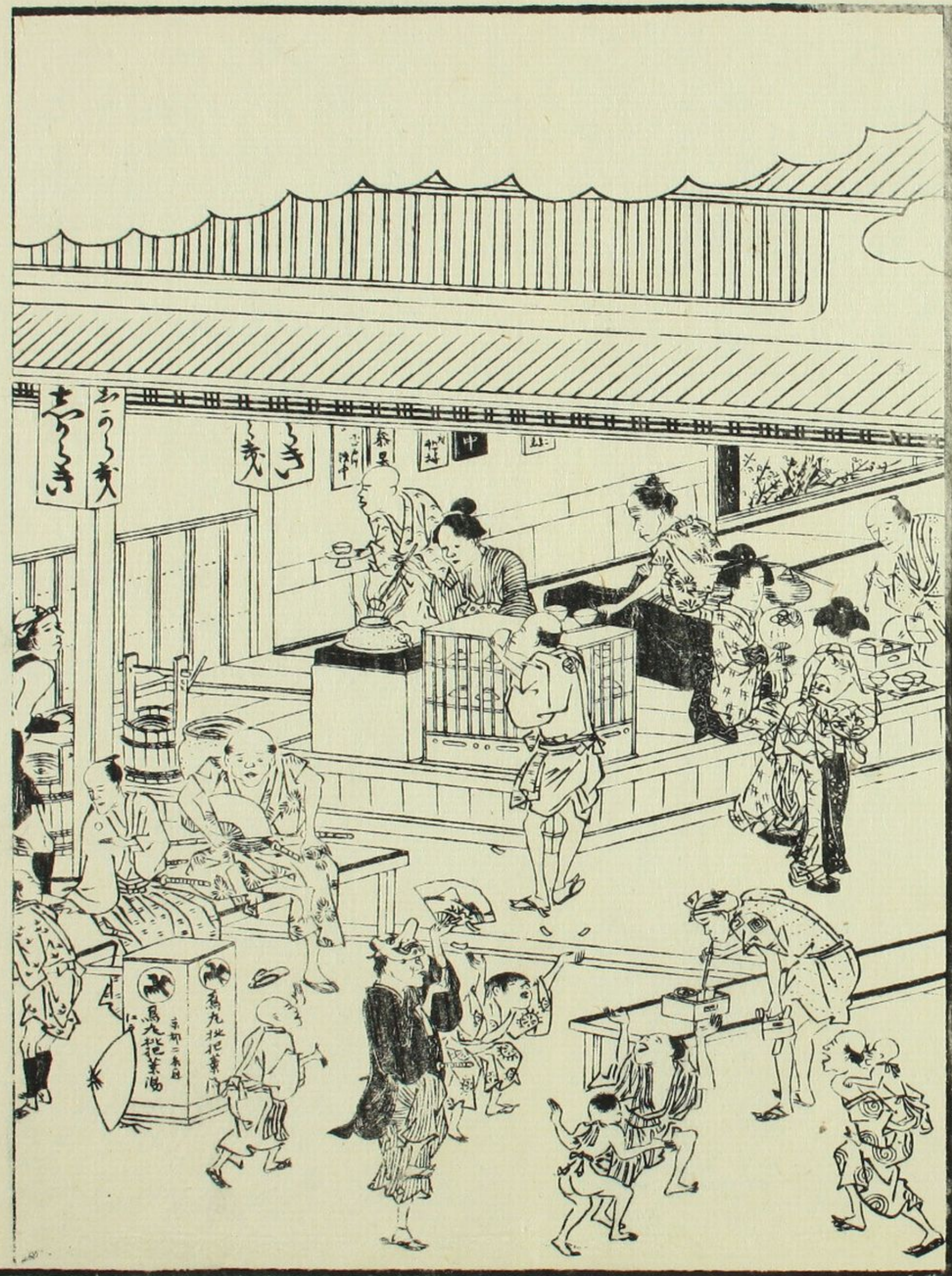
新橋
夕苗橋





尾張町
布袋屋
電屋
惠比須屋
呉服店





金六町
あつぎ
茶店

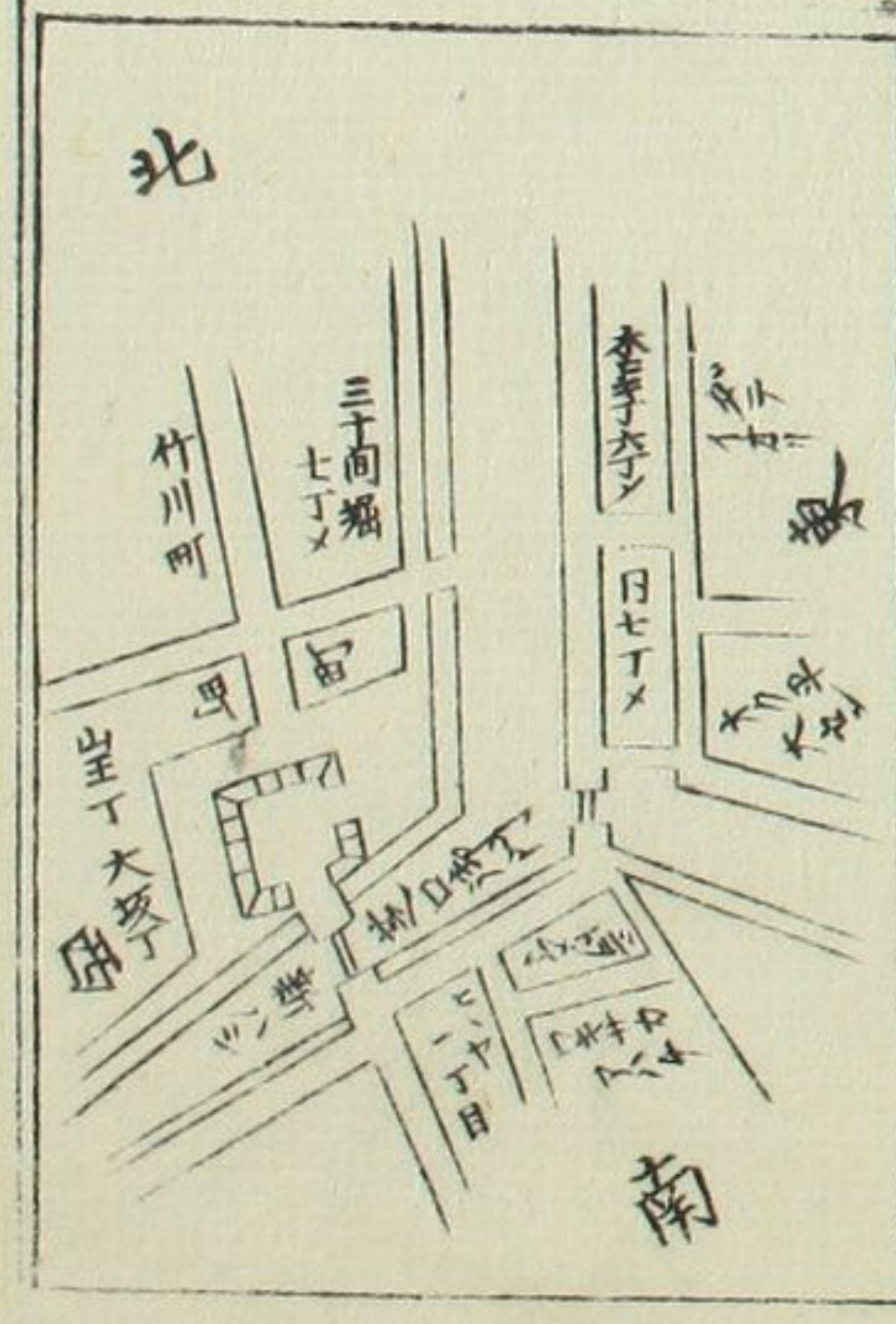
火災の後やき八麴町三丁目の裏へうつされ同十二年の頃跡へ
 新馬場を開くもこの地馬場の地天明五年今の芝西應寺町の代
 此所の井と采女の井との名も彼やききの用水あり故ふ名つあり
 奇舞妓芝居 木挽町五丁目あり今森田勘弥の奇舞妓芝居綿々
 とく相續す 芝居の基原八塚町青屋町昔ハ此所六丁目山村長太夫
 とのひ名代の狂言座あり中村市村森田等の芝居とありせ
 まく四座ありと正徳四年の頃故ありて此芝居を止めらるる山村長
 初ハ岡村長太夫と云実子なく山村長太夫とて養子とす二代岡村
 五郎左衛門是なり後名を改て山村長太夫とて是も女子のありてハ
 相續す此の時に至りて断絶せり此芝居ハ正徳元年申歳は始りて東海道
 記ハ木挽町喜太夫浄瑠璃外異類異形のものと云るも昔ハ狂言
 座の外は是物あり

織田有樂齋弟宅地 元教寄屋町の地なりと云慶長の頃此地と織田
 有樂齋賜りて後ハ空地となりて三四丁程芝生とあり春々
 摘草夏ハ池水小涼んとて其頃ハ林泉の形も残り殊更櫻楓ホの

二樹多く春秋共遊望の地ゆく寛永の頃迄ハ折ふありて
 大樹此地ハ遊獵をわせられとあり 有樂齋名長益源五郎と
 融覚信長公の弟やと茶道と利休居士に受て一家の風あり元和七年卒
 此人茶室長す故宅地ハこのとて教寄屋を建置れ一曰跡なりと云
 後世主人教寄屋の歌とて町の名よりと云る

新橋 大通り筋出雲町と芝口一丁目との間ハ係正徳元年辛卯朝鮮
 人來聘の前宝永七年庚寅此所ハ新馬場を造営ありて
 芝口御門と唱へ橋の名も芝口橋と更らるる享保九年正月廿九日
 の火災ハ燒亡せし後ハ復旧の町家とあされり此川筋の東木挽町
 七丁目と芝口新町の間ハ架せし
 汐留と云ふ

正徳四年
 江戸圖



江戸名所圖會天樞之上界

全子横山町
成内穎一

二八十九

